

南山大学 2020 年度卒業論文

江戸時代後期の洒落本における丁寧の助動詞
「マス」の命令形

指導教員 平子 達也 先生

学生番号 2017HJ128

氏名 山田 玲央奈

要旨

本論文は、江戸時代後期の洒落本における丁寧の助動詞「マス」の命令形「マセ」と「マシ」の使用頻度とその理由について考察する。

(1)のように使用される丁寧の助動詞「マス」の命令形「マセ」は、江戸時代以前から使われている形である。

(1) 出雲の松江駕籠の紋は、丸に蔦の葉、退きませ

『薩摩歌』

一方(2)のように使用される「マシ」は、江戸時代後期になって出現する形である。

(2) さあ皆様へお出なさりまし

『南閨雑話』

桜井(1971: 332)によれば、「マシ」出現後には「マセ」より「マシ」が優勢になっていくと述べられている。しかし、桜井(1971)の研究は「マシ」出現前後の時期を対象としたものである。また、本論文で先行研究として取り上げている三原(2019: 317 - 334)の研究は桜井(1971)とは異なる咄本を用いたものである。

本論文は、桜井(1971)と三原(2019)の研究を補足すべく、洒落本大成 6 巻から 29 巻を調査した結果を述べる。

筆者の調査によれば、1773 年に「マシ」が出現し、1785 年頃から「マシ」が優勢となるが、1814 年頃からは「マセ」と「マシ」の使用頻度は拮抗し、1844 年頃から「マセ」が優勢となることが明らかになった。

また、「マシ」が一時的に優勢となる要因として三原(2019)の先行研究で挙げられていた接続の観点からも調査を行った。その結果、「マシ」が「マセ」より多くの語と接続するという現象は確認できなかったため、「マシ」が一時的に優勢となる要因は接続とは別にあることが明らかになった。

目次

1. はじめに.....	1
1.1 対象とする言語.....	1
1.2 対象とする現象.....	1
2. 先行研究と問題の所在.....	2
2.1 桜井光昭の先行研究について.....	2
2.2 三原裕子の先行研究について.....	3
3. 調査について.....	4
3.1 調査方法について.....	4
3.2 調査結果と考察.....	4
3.3 本節のまとめ.....	8
4. おわりに.....	8
【参考資料】.....	9
【調査資料】.....	9
【付録】.....	11

1. はじめに

本論文では、江戸独自の言語である江戸語を対象とする。本研究の目的は、江戸時代後期に見られた丁寧の助動詞「マス」の命令形「マセ」とその江戸独自の形である「マシ」の優劣についての記述をすることである。

1. 1 対象とする言語

江戸語とは江戸時代に徳川幕府のお膝元である江戸で形成された言語で、その土地のもともとの言語である関東方言を基盤に上方文化の影響を受け上方語的な部分が多いという特徴がある。

その理由として野村(2013)は、江戸に幕府が開かれた際に、上方語地域の人々や20-30年間、上方で言語訓練した旧豊臣政権の武士が江戸に大挙して移動したことで独自の言語形態を形成したことを挙げている。また、改まった場にて話される言葉が当時の共通語スタイルであった上方語というものもあり、江戸語の言語形成に強く影響したとしている。

本研究では、江戸時代の中でも三原(2019: 317)が江戸語の形成過程からみて最も重要だと述べていた安永年間(1772年-)から幕末までを対象にしている。

1. 2 対象とする現象

江戸語には、独自の音声的特徴があるが本研究では丁寧語「マス」の命令形「マセ」と江戸独自の形である「マシ」に焦点をあてる。

a. 丸に蔦の葉、退きませ退け、とつと退け

(『薩摩歌』)

b. 程なくてうし。硯ぶた。鉢肴。たばこぼん。ども持きたる若さあ皆様へお出なさりまし里こつちへ。おはいりねんし女郎共すらりとならび忠治を見てにつこり

(『南閩雑話』)

例文 **a.** と **b.** は、いずれも丁寧語「マス」の命令形を含む例文で、下線部が「マス」の命令形である。双方江戸時代における初出の例を取り上げたが、**a.** の文を含む『薩摩歌』の成立年は1704年、**b.** の文を含む『南閩雑話』の成立年は1773年である。つまり、元々は「マセ」が用いられていたところに、江戸時代後期になって「マシ」が出現し、用いられるようになったと言える。

桜井(1971: 332)によれば、その後「マシ」が優勢になっていくという。

本研究では、この江戸時代後期における「マセ」と「マシ」の優劣について、先行研究が用いていない資料を調査し、それを明らかにすることを目的とする。以下2節で先行研究とそれらの具体的な問題点について述べる。

2. 先行研究と問題の所在

2. 1 桜井光昭の先行研究について

桜井(1971:332)によれば、「マシ」は「マセ」が転じたもので「セ→シ」の江戸末期によくみられた音転の現象によるものだという。また、桜井は「マス」の命令形には「マセ」「マセイ」「マシ」があり、その中でも「マシ」は江戸語の特色の一つで、後期江戸でも早いうちは「マセ」の方が多かったが、時代とともに「マシ」の数が増えていったとも述べている。

表1は桜井の先行研究から抜粋したものである。この表を見ると、1773年の『南閨雑話』で「マシ」が優勢となり、1775年の『甲斐新話』では「マシ」が他の命令表現に比べて圧倒的に優勢であることが分かる。

	マセ	マシ	ナサイ	ナセエ	ネエ
異素六帖 (1757)	0	0	0	0	0
郭中奇譚 (1769)	10	0	4	0	2
遊子方言 (1770)	12	0	6	0	0
辰巳之園 (1770)	6	0	1	0	38
蕩子筌枉解 (1770)	1	0	1	0	0
当世気どり草 (1773)	0	0	0	0	1
南閨雑話 (1773)	1	4	0	0	0
甲斐新話 (1775)	0	29	0	11	4

表1 【桜井光昭(1971:341)より一部抜粋】

ただ、桜井の研究は、江戸時代後期の洒落本でも「マシ」が出現してから優勢になった時期に焦点を当てたものである。

そのため、「マシ」の初出年代から優勢となった後も含めた江戸後期全体における「マセ」と「マシ」の優劣について論じるには十分なデータがない。本研究では、この桜井の欠を補うべく、「マシ」が出現したところから幕末までの洒落本を扱うこととする。

2. 2 三原裕子の先行研究について

三原(2019 : 317 - 334)によれば、後期咄本の成立から衰退に至る安永年間から天保年間(1800 年前後から約 80 年間)は、江戸語の形成過程において最も重要な時期であり、安永、天保期に江戸語が江戸共通の言語として確立した時期だという。

三原(同)は、後期咄本をもとに丁寧の助動詞「マス」の命令形「マセ」と「マシ」についての考察をしている。なお、三原は「マセ」→「マシ」の現象を交替現象と称している。

三原は「マセ」から「マシ」の移行について『日本国語大辞典』の記述をもとに「ましよりもませ」が共通語と感ぜられている状況が観察され、いったんは「ませ」から「まし」に移行しながらも、再び「ませ」が広範に使用され、使用を優勢にしていく傾向が見られると記述している。

また、使用差に関しては、「マセ」の方が「マシ」より丁寧な表現として用いられ、「マシ」は「マセ」より軽い語調だろうと述べている。一方、男女ともに発話例が確認されるとともに、階層、職種といった枠組みでの使用差も見られなかったという。

さて、三原の調査は、安永年間から幕末までの後期咄本のうち 217 作品を対象としている。結果として、「マセ」160 例、「マシ」118 例の計 278 例が確認されている。また、その調査結果を三原は、表 2 のように元号ごとに整理している。¹

	安永	天明	寛政	享和	文化	文政	天保	弘化	嘉永	安政	元治	慶応	明治	計
ませ例数	52	18	36	0	28	10	11	1	2	0	0	0	2	160
作品数	22	14	14	0	12	6	4	1	1	0	0	0	1	75
まし例数	18	9	21	11	20	6	19	4	3	2	2	2	1	118
作品数	7	6	9	4	6	3	8	1	2	1	1	1	1	50

表 2 【「マセ」と「マシ」時期別使用状況：三原(2019 : 320) から引用】

接続からみた考察では、「マシ」は「マセ」では接続しない語とも接続したことから一時は使用範囲を広げただろうことが述べられている。その後、「マシ」は改まった場では使用が避けられ、「マセ」志向になったことが、「マセ」が劣勢から再び優勢になった要因だと三

¹ 安永 1772-1780、天明 1781-1788、寛政 1789-1800、享和 1801-1803、文化 1804-1817、文政 1818-1829
天保 1830-1843、弘化 1844-1847、嘉永 1848-1853、安政 1854-1859、万延 1860、文久 1861-1862、元治 1864
慶応 1865-1867

原は推測している。

三原の研究では、「マシ」が出現したところから幕末までを網羅しているが、扱っている資料が咄本にかぎられている。資料による差が生じる点を考慮し、本研究では三原が扱った咄本と同時期に成立した洒落本を扱う。

また、三原の研究から「マセ」と「マシ」の優劣には前接語が関係していることが示唆されている。こちらも洒落本を用いた調査結果を整理して検証する。

3. 調査について

3. 1 調査方法について

江戸時代後期、特に三原(2019: 317 - 334)が江戸語の形成過程からみて最も重要だと述べていた安永年間から幕末まで(1772年 - 1867年)を対象として調査を行う。また、調査に用いる文献資料は先行研究で三原が用いていなかった洒落本で、かつ、桜井(1971: 332)が扱わなかった時期のものを用いる。こうした調査によって、桜井が調査した時期以降のデータを補足しつつ、洒落本を用いた調査結果と三原が用いた咄本の調査結果が異ならないか資料差の有無も見ることができる。

調査対象とする洒落本については、中央公論社が発行している『洒落本大成』を用いて調査を行う。

今回は、「マシ」の初出である『南閨雑話』を含む『洒落本大成』の6巻から最終巻である29巻までを用いて調査を行った結果を報告する。

3. 2 調査結果と考察

既に見たように、洒落本を使った先行研究である桜井(1971: 332)は、江戸時代後期になって「マシ」が表れ、その後「マセ」より「マシ」が優勢になっていくと述べていた。

一方、桜井(1971: 332)が調査した、1775年成立の『甲斐新話』以降に成立した洒落本にも「マセ」の使用は以下のように確認することができた。

ぬけものないお方とぞんしますればこそなみに下され ませ と申ます
『契国策』(1776)

そんならゑびやにおきよめなされ ませ
『穴知鳥』(1777)

つまり、「マシ」が優勢になった後も「マセ」は全く使用されなくなったわけではないと

いうことである。これは、咄本を対象とした三原（2019）の調査結果とも符合する。

「マセ」と「マシ」の使用者についても性別、職業関係なくどちらの語も使用しており、三原が咄本の調査結果に基づいて指摘しているような差は見られなかった。

また、「マセ」と「マシ」どちらかに使用が偏る作品が多い中で、同じ作品中に一人の人物が同じ人に対しての発言において「マセ」「マシ」二つとも使用される以下のような例もあり、敬意の対象の位に左右されない例も見られた。

ちとおくだけなされ ませ

『穴知鳥』（1777）

イヤちとおまちなされ まし

この二つの例はいずれも『穴知鳥』に登場する男が店の女との会話の中で確認できた。このような例は、同書にもう1例、『広街一寸間遊』にも1例確認できた。

ここで、今回調査を行った洒落本大成6巻から29巻における「マセ」「マシ」の件数を5年ごとに分け、表にまとめて掲示する。正確な成立年が分からない作品については、その作品が掲載されている巻と同じ巻に掲載されている作品と成立年が近いと想定して前半部分（上表）と後半部分（下表）の「不明」の欄に分けてまとめている。洒落本大成は、作品の成立年順に掲載されていることを加味してこの対応をとった。

	1773－	1779－	1785－	1791－	1797－	1802－	不明
マセ	36	80	29	6	59	92	41
マシ	42	71	67	32	102	172	116

	1808－	1814－	1820－	1826－	1832－	1838－	1844－	不明
マセ	3	13	5	24	1	0	14	41
マシ	23	11	25	5	17	0	0	71

表3 【安永から幕末までの洒落本における「マセ」と「マシ」の使用頻度】

洒落本大成6巻から29巻までを調査した結果、「マセ」は446件、「マシ」は757件と三原(2019: 317-334)より遥かに多くの例を確認することができた。

表3から分かるように「マシ」が「マセ」より優勢となるのは1785年頃からである。また、三原(同)で述べていた、再び「ませ」が広範に使用され、使用を優勢にしていく傾向は1844年以降であるとも言えるが、この傾向が見られる時期を明治以降とする三原(同)とは異なる。

また、表3を見ると、1808年以降から「マセ」「マシ」ともにその数を減少させている。この現象は、三原(同)では見られなかった現象で、「マセ」「マシ」の確認数が多い洒落本だ

からこそ見えてきたものだと考える。

そして、この現象の原因については、他の丁寧の助動詞の命令形の出現や、洒落本の作品数の減少も関係していると推測する。

初めに他の丁寧の助動詞の命令形について挙げていく。

(a) アレサそりよヲおくんなんし

『起承転合』

(a)のように使用される「ナンシ」が挙げられる。『起承転合』は、1802年成立の洒落本であるが、「ナンシ」の初出は、日本語歴史コーパス『中納言』を用いて調べた結果、1773年成立の洒落本『南閨雑話』であった。

(b) 外の太夫さんがたに。しなませ

『一文塊』

また、(b)のように使用される「ナマセ」も挙げられる。『一文塊』の成立年は1807年であるが、同じく日本語歴史コーパス『中納言』を用いて調べた結果、「ナマセ」の初出は1798年成立の洒落本『阿蘭陀鏡』であった。

(c) 人形をもつてきてくんなまし

『後要心身上八卦』

さらに、このように使用される「ナマシ」も挙げられる。『後要心身上八卦』の成立年は1833年であるが、同じく日本語歴史コーパス『中納言』を用いて調べた結果、「ナマシ」の初出は1832年成立の人情本『春色梅児与美』であった。

次に、洒落本のそもそもの作品数が減少していることが影響しているか否かについて明らかにするため「マセ」「マシ」が確認された作品の数を5年ごとに表にまとめた。

	1773-	1779-	1785-	1791-	1797-	1802-	不明
マセ	8	27	12	5	19	25	25
マシ	4	25	18	4	31	29	24

	1808-	1814-	1820-	1826-	1832-	1838-	1844-	不明
マセ	3	4	4	5	1	0	1	5
マシ	6	1	6	2	3	0	0	9

表4 【安永から幕末までの洒落本の作品数】

表4から分かるように、1808年以降は作品の数自体が減少していることが分かる。今回調査資料に用いた洒落本大成も1773年から1807年の作品が6巻から24巻に収録され、1808年以降が25巻から29巻に収録されており、「マセ」「マシ」が確認される作品に限らず作品自体の数が減少しており、大幅な「マセ」「マシ」の件数減少の要因は洒落本の作品数の減少にあるとも考えられる。

また、1785年から件数を増やしている「マシ」については、三原(2019:317-334)の記述にある「マシ」は「マセ」では接続しない語とも接続したことが、「マシ」が一時的に優勢となる要因として挙げられている。そこで、今回調査を行った資料における「マセ」「マシ」の前についている語の品詞と活用形についてまとめる。

	1773-	1779-	1785-	1791-	1797-	1802-	不明
マセ	16	42	18	2	32	62	25
マシ	56	55	54	27	80	144	104

	1808-	1814-	1820-	1826-	1832-	1838-	1844-	不明
マセ	2	12	2	14	1	0	6	16
マシ	16	10	20	5	17	0	0	44

表5 【前接語が動詞の連用形の件数】

	1773-	1779-	1785-	1791-	1797-	1802-	不明
マセ	18	34	9	3	19	24	26
マシ	6	11	11	5	26	8	8

	1808-	1814-	1820-	1826-	1832-	1838-	1844-	不明
マセ	2	1	2	10	0	0	8	12
マシ	7	1	7	0	0	0	0	9

表6 【前接語が動詞の連体形の件数】

「マセ」と「マシ」の前接語は基本的には表5と表6に挙げられる動詞の連用形と連体形である。この二つに当てはまらない前接語を含む文を挙げていく。

(d) だいじかようてこませ

『婦足鬪』(1802)

「マセ」の接続に関しては、(d)のような接続の仕方をしている文が1件見られた。

(e) 権さまの首ツ玉サへさへつけて居やしやまし

『潮来婦志』(成立年不明)

「マシ」の接続に関しては、(e)のような接続の仕方をしている文が3件見られた。

「マセ」「マシ」ともに例外が存在したが、件数から見るに「マセ」「マシ」の優劣には関係していないと考えられる。これは、「マセ」では接続しない語とも接続したことから「マシ」の使用範囲が一時的に広がったとする三原(2019: 317-334)の先行研究とは異なる。

3. 3 本節のまとめ

筆者の洒落本を用いた調査結果からは、江戸後期における「マセ」「マシ」の優劣について、「マシ」が一時的に優勢となる時期を三原(2019: 317-334)は咄本で行った調査結果から享和あたりとしていたが、それより早い1785年頃であることが明らかになった。また、「マセ」が再び優勢になる時期についても、三原(同)は明治以降としていたのに対して、筆者の調査からは1844年頃からという結果が得られた。また、後期江戸でも早いうちは「マセ」の方が多かったが、時代とともに「マシ」の数が増えていったと桜井(1971: 332)は述べていたが、実際には「マシ」出現後も「マセ」は使われ再び優勢となっていくことが明らかになった。

「マシ」が一時的に優勢となることについて三原(同)は、「マシ」の方が「マセ」より多くの語と接続できることが理由だと述べていたが今回の調査では、「マシ」が「マセ」より多くの語と接続している現象は見られなかった。

4. おわりに

本論文では、江戸時代後期の洒落本を用いて、丁寧の助動詞の命令形「マセ」と「マシ」についてまとめた。

使用頻度の優劣については、1773年に「マシ」が出現し、1785年頃から「マシ」が優勢となり、1814年頃からその使用頻度の優劣は拮抗し、1844年頃から「マセ」が優勢になることが明らかとなり、享和(1801-1803)に「マシ」が優勢となって、文化(1804-1817)以降より優劣が拮抗し、明治以降に「マセ」が再び優勢となっていた三原(2019: 317-334)

の先行研究とは異なる結果が得られた。

「マシ」が優勢となる要因としては、三原(同)の先行研究で挙げられていた接続の観点から調査結果を整理したが、「マセ」「マシ」に大きな違いが見られなかったため、他の要因があると考えられる。

今回の調査では、「マシ」が一時的に優勢となる、接続とは別の要因について明らかにすることができなかつたため今後、洒落本の作品内の話者の性別や階層について詳しく調べ表に起こす等、今回の調査とは別の観点から「マセ」「マシ」を調査する必要がある。

【参考文献】

- ・ 国立国語研究所(2019)『日本語歴史コーパス』 <http://chunagon.ninjal.ac.jp/>
(2021年1月18日確認)
- ・ 桜井光昭(1971)「近代の敬語 I」『講座国語史 第五巻 敬語史』188-193、332 大修館書店
- ・ 高木市之助、山岸徳乎他 2 名(監修)(1961)『日本古典全書 浮世床』中西善三校注 朝日新聞社
- ・ 三原裕子(2019)『ひつじ研究叢書〈言語編〉第 159 巻 江戸語資料としての後期咄本の研究』317-334 株式会社ひつじ書房

【調査文献】

- ・ 水野稔『洒落本大成 第六巻』(1979) 中央公論社
- 『洒落本大成 第七巻』(1980) 中央公論社
- 『洒落本大成 第八巻』(1980) 中央公論社
- 『洒落本大成 第九巻』(1980) 中央公論社
- 『洒落本大成 第十巻』(1980) 中央公論社
- 『洒落本大成 第十一巻』(1981) 中央公論社
- 『洒落本大成 第十二巻』(1981) 中央公論社
- 『洒落本大成 第十三巻』(1981) 中央公論社
- 『洒落本大成 第十四巻』(1981) 中央公論社
- 『洒落本大成 第十五巻』(1982) 中央公論社
- 『洒落本大成 第十六巻』(1982) 中央公論社
- 『洒落本大成 第十七巻』(1982) 中央公論社
- 『洒落本大成 第十八巻』(1983) 中央公論社
- 『洒落本大成 第十九巻』(1983) 中央公論社
- 『洒落本大成 第二十巻』(1983) 中央公論社
- 『洒落本大成 第二十一巻』(1984) 中央公論社

- 『洒落本大成 第二十二卷』(1984) 中央公論社
『洒落本大成 第二十三卷』(1985) 中央公論社
『洒落本大成 第二十四卷』(1985) 中央公論社
『洒落本大成 第二十五卷』(1986) 中央公論社
『洒落本大成 第二十六卷』(1986) 中央公論社
『洒落本大成 第二十七卷』(1987) 中央公論社
『洒落本大成 第二十八卷』(1987) 中央公論社
『洒落本大成 第二十九卷』(1988) 中央公論社

※●は解読不能表記だった文字である。

「マセ」【洒落本大成第六卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
お目長う卸ろう して下さり	ませ	といふうち	綱太夫	桔梗卦	1773	28	下段 13 行
も一つめしあが り	ませ		忠治(客)	南閨雑話	1773	49	上段 14 行
ちとあやかりお はし	ませ	といただかするな ど	ほうろく (独白)	風流醉談議五之巻	1774	127	下段 7 行
ハイ御めんなさ り	ませ	とこしをかくれば	和大	婦美車紫(しかへんに子)	1774	141	下段 4 行
一筆かいてつか はされ	ませ	とくわ中矢立を	和大	婦美車紫(しかへんに子)	1774	151	下段 5 行
サおたちなさり	ませ		和大	婦美車紫(しかへんに子)	1774	151	下段 13 行
サ野呂右エ門様 おあがりなさり	ませ		清和	婦美車紫(しかへんに子)	1774	153	下段 9 行
両国しぼりを呼 なさり	ませ		年マ僧	婦美車紫(しかへんに子)	1774	154	下段 11 行
かいてやつてく ださり	ませ	とぬかすから	年マ僧	婦美車紫(しかへんに子)	1774	155	上段 6 行
さつをおつれな さり	ませ		房女	婦美車紫(しかへんに子)	1774	156	上段 1 行
もちつとおやす みなされ	ませ		清和	婦美車紫(しかへんに子)	1774	158	下段 7 行
まづおまち被成	ませ		清和	婦美車紫(しかへんに子)	1774	158	下段 9 行
私に御めんじ下 さり	ませ		清和	婦美車紫(しかへんに子)	1774	159	下段 7 行
先あれへおいて なさり	ませ	といふに	清和	婦美車紫(しかへんに子)	1774	160	上段 5 行
ハイさやうなら ごめんなさり	ませ	とせうじを明て内 へはいる	助新	婦美車紫(しかへんに子)	1774	160	下段 7 行
ハイどふそけふ はおいでなさり	ませ	(言葉終わり)	助新	婦美車紫(しかへんに子)	1774	160	下段 10 行
だれぞ外のもの になされ	ませ		女	青楼楽美種		321	上段 17 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
御出被成	ませ		男	寸南破良意		334	上段 5 行
御やすみ被成	ませ	。	半七	寸南破良意		337	上段 12 行
チトおより被成	ませ		女良屋の男	寸南破良意		351	上段 9 行

【洒落本大成第七巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
サア御出なされ	ませ	ヲツト頼ムと脇差ヲ預ケ	女房	当世左様候	1776	15	上段 7 行
なみにおやりなされ	ませ		かこ	契国策	1776	65	上段 11 行
なみに下され	ませ	と申ますおちや屋へみつて	かこ	契国策	1776	65	下段 7 行
もらつて下され	ませ		僧	契国策	1776	66	下段 2 行
せい出すものかてうど もらつて下され	ませ		かこ	契国策	1776	66	下段 9 行
ゆるりとお上りなされ	ませ		清助	穴知鳥	1777	151	下段 1 行
そのけないて一ツ上り	ませ		船宿の若イ者藤兵衛	穴知鳥	1777	152	下段 4 行
モシちとあちらへお出 なされ	ませ		若イ者	穴知鳥	1777	153	上段 7 行
そんならゆるりとおあ そひなされ	ませ	とちやうちん付て	船宿の若イ者藤兵衛	穴知鳥	1777	153	上段 15 行
イヤわたくしはモウ御 めんなされ	ませ		喜七	穴知鳥	1777	154	上段 9 行
ちとおくだけなされ	ませ		船宿の男	通志選		165	下段 4 行
是へお這入なされ	ませ	トあんどををかきたてる	後家	通志選		169	上段 3 行
アイちとこちらへおよ りなされ	ませ		若者源兵衛	通志選		169	上段 12 行
ゆるりとお上りなされ	ませ		清助	穴知鳥	1777	151	下段 1 行
そのけないて一ツ上り	ませ		船宿の若イ者藤兵衛	穴知鳥	1777	152	下段 4 行
モシちとあちらへお出 なされ	ませ		若イ者	穴知鳥	1777	153	上段 7 行
そんならゆるりとおあ そひなされ	ませ	とちやうちん付て	船宿の若イ者藤兵衛	穴知鳥	1777	153	上段 15 行
イヤわたくしはモウ御 めんなされ	ませ		喜七	穴知鳥	1777	154	上段 9 行
ちとおくだけなされ	ませ		船宿の男	通志選		165	下段 4 行
是へお這入なされ	ませ	トあんどををかきたてる	後家	通志選		169	上段 3 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
アイちとこちらへおよ りなされ	ませ		若者源兵衛	通志選		169	上段12行
ゆるりとお上りなされ	ませ		清助	通志選		170	上段4行
ヲットそのけないて一 ツ上り	ませ		船宿の若イ者藤兵衛	通志選		171	上段7行
モシちとあちらへお出 なされ	ませ		若イ者	通志選		171	下段10行
そんならゆるりとおあ そひなされ	ませ	とちやうちん付て階子をおりる	船宿の若イ者藤兵衛	通志選		172	上段1行
イヤわたくしはモウ御 めんなされ	ませ		喜七	通志選		172	下段12行
今一度春をさせて下さ り	ませ	と折て見ても印なく去とは	作者	中洲雀		186	上段11行
どこにいたしませうお きめなされ	ませ	聞てまいります	丹公	売花新駅		200	上段14行
ナアニよこ雲●になさ れ	ませ		丹公	売花新駅		200	下段4行
サア御出被成	ませ		丹公	売花新駅		200	下段11行
ちとあがり	ませ		おすや	売花新駅		202	下段14行
おざしきへおいでなさ れ	ませ		おすや	売花新駅		203	上段7行
どなたもおやすみなさ れ	ませ	もはやさんじます	丹公	売花新駅		203	上段17行
ごめんくださり	ませ	と。りやう手をさげる。	佐二	広街一寸間 遊		259	下段16行
ちつとおかけなされ	ませ	。	かみ	契情買虎之 巻		310	上段17行
よつくおはなしなさつ て下さり	ませ	うきはししはらくしあんして	いせや	契情買虎之 巻		317	上段8行
まあまあちとおまちな され	ませ	いやもふこれはとふもけしからぬと んた事	若いもの	三幅対		354	上段8行

【洒落本大成第八卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
御機げんよふおあそび遊して下さり	ませ		若者	胡蝶夢	1778	59	上段 10 行
一日もはやくおむかひとらして下され	ませ	と。	太子	一事千金		80	下段 9 行
お休みなさい	ませ	といつてくる	若イ者	蚊不喚呪詛曾我		163	下段 5 行
サアぬがしやり	ませ		千代	蚊不喚呪詛曾我		166	下段 5 行
ごさつし下あり	ませ	。	可流	家暮長命四季物語	1779	252	下段 9 行
おはやふおいであそばし	ませ	。	たいこ持	風流裸人形		277	上段 1 行
ごけん物なさり	ませ	。	女房	百安楚飛	1779	321	上段 5 行
こちらへお出でなされ	ませ	と	茶屋の男	百安楚飛	1779	321	下段 3 行

【洒落本大成第九卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
お出なさり	ませ	。	和田鞠負	伊賀越増補合羽之竜	1779	37	下段 2 行
まづ一ツ上り	ませ		女房	駅舎三友	1779	70	上段 2 行
おはいりなされ	ませ		女房	駅舎三友	1779	70	上段 15 行
サアいらつしやい	ませ		女房	駅舎三友	1779	70	下段 13 行
もし御めしかへなされ	ませ		若者善二	駅舎三友	1779	71	上段 10 行
しづかにおつしやり	ませ		頭取	客者評判記	1780	152	下段 12 行
おしづかにおつしやり	ませ		頭取	客者評判記	1780	153	下段 8 行
仰下され	ませ	。	貧幸せんせい	貧幸先生多佳余字辞	1780	196	下段 16 行
あれへお出なされ	ませ		若者	貧幸先生多佳余字辞	1780	201	上段 10 行
おちやあかり	ませ	と出す	ちや屋女房	当世真似山気登里	1780	213	上段 1 行
お一ツ上り	ませ		娘およね	初葉南志	1780	221	上段 14 行
お上がりなされ	ませ		船頭	初葉南志	1780	223	下段 16 行
まつお盃をお済しなされ	ませ	と	二郎	初葉南志	1780	224	下段 6 行
部やもちにもなされ	ませ		源次	初葉南志	1780	225	下段 4 行
女郎●がたになされ	ませ		栄三	初葉南志	1780	225	下段 8 行
油堀になされ	ませ		紀文	初葉南志	1780	226	下段 15 行
外へお出下され	ませ	と	舟宿衆	初葉南志	1780	227	上段 15 行
浜岡やと申すになされ	ませ		駕の者	初葉南志	1780	230	上段 17 行
おくへお通り下され	ませ	と	駕の者	初葉南志	1780	230	下段 9 行
見くらべになされ	ませ	と云へば	駕の者	初葉南志	1780	231	上段 3 行
是よりお見知下され	ませ		長兵衛	初葉南志	1780	231	上段 6 行
あれへお出遊ばし	ませ	といふうち	長兵衛	初葉南志	1780	231	下段 10 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
お出なされ	ませ		お座敷や	初葉南志	1780	232	上段 10 行
サアお出なされ	ませ	と横のさきへたち	三五	初葉南志	1780	232	上段 17 行
お一ツ上かり	ませ	と申せば	三五	初葉南志	1780	232	下段 7 行
あなた方見ぬふりをなされ	ませ		栄三郎	初葉南志	1780	232	下段 13 行
お遣し遊ばし	ませ	。	栄三郎	初葉南志	1780	233	下段 1 行
旦那ごらふじ	ませ	出せば	長兵衛	初葉南志	1780	233	下段 16 行
召上られ下さり	ませ	と申せば	長兵衛	初葉南志	1780	234	上段 16 行
マツお静になされ	ませ		長兵衛	初葉南志	1780	235	上段 2 行
小声になされ	ませ	と	長兵衛	初葉南志	1780	235	上段 4 行
御覧	ませ		横の	初葉南志	1780	236	上段 2 行
お休みなされ	ませ		横の	初葉南志	1780	236	上段 4 行
サア御覧じ	ませ	と出せば	刀屋半エ門	初葉南志	1780	236	上段 17 行
アイお上かりなされ	ませ		お座敷や	初葉南志	1780	237	上段 13 行
お肴にお呼びなされ	ませ	。	菊五郎	初葉南志	1780	237	下段 10 行
お燗を温く直し上ケ	ませ	よ	内義	初葉南志	1780	241	下段 3 行
奥座敷へお出下さり	ませ	と申せば	八兵衛	初葉南志	1780	241	下段 4 行
お過し下さり	ませ	と申せば	内義	初葉南志	1780	242	上段 4 行
おやすみなされ	ませ	。	女	風流仙婦伝	1780	276	下段 15 行
お上がり遊し	ませ	。	茶や女房	芳深交話	1780	292	上段 8 行
座敷は外になすつて下さい	ませ	とのこと	大津屋かん四郎	弁蒙通人講釈	1780	375	下段 8 行

【洒落本大成第十巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
お咄ながら御出下さり	ませ	なんぞと言と。	放蕩者	根柄異軒之伝	1780	56	下段 12 行
ぐつと近ふお寄なされ	ませ	と小声になり。	放蕩者	根柄異軒之伝	1780	58	上段 15 行
サア御上りあそはし	ませ	。	山助	通人鬼打豆	1780	247	下段 13 行
直に付ざしに遊し	ませ	といふ所へ	茶や	廓遊唐人寮言		274	下段 4 行
何卒おしる人におなり下され	ませ	といへば	浅草辺の者	記原情語		295	上段 5 行
サアお出被成	ませ	と	女房	雲井双紙	1781	307	下段 8 行
サアお上り遊し	ませ		かかア	雲井双紙	1781	308	下段 3 行
お出遊し	ませ		若イ者	雲井双紙	1781	308	下段 15 行
こちらへおはいり遊し	ませ	と燭台へ	伊平二	雲井双紙	1781	308	下段 17 行

【洒落本大成第十一卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
草そうしをごろうし	ませ	。	作者	舌講油通汚	1781	14	上段 10 行
おつれなさり	ませ	と。	隠居	通仁枕言葉		30	下段 14 行
おきめなきつて下さり	ませ	と。	梅田	通仁枕言葉		35	上段 14 行
こちらの方をおとをり なされ	ませ		むすこ	根津見子楼茂	1782	292	下段 14 行
女郎衆のざしきをおし つけごろふじ	ませ		茶や	根津見子楼茂	1782	293	下段 2 行
どなたもおほいりな され	ませ		若い者	根津見子楼茂	1782	293	下段 7 行
おとりなされてくださ り	ませ	といやしたら	若い者	根津見子楼茂	1782	295	下段 7 行
とかくおたてなされて 下さり	ませ		茶や	根津見子楼茂	1782	296	上段 12 行
ちつとおみでなさり	ませ		若い者	根津見子楼茂	1782	296	下段 3 行
ここへおほりなさり	ませ		茶や	根津見子楼茂	1782	296	下段 9 行
おほりなさり	ませ		喜七	根津見子楼茂	1782	297	下段 16 行
はんにやちかわぬ。やう になされ	ませ	といひて	若い者	こんたん手引くさ	1782	333	下段 17 行
ゆるりとおやすみなさ り	ませ		お針	富賀川拜見	1782	353	下段 5 行

【洒落本大成第十二卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
是へおあがりなされ	ませ		御師手代源太兵衛	恵世ものかたり	1782	42	上段 3 行
二階へ御上りなされ	ませ	。	ちきりや女よし	恵世ものかたり	1782	42	上段 4 行
おひとつめしあかり	ませ		御師手代源太兵衛	恵世ものかたり	1782	42	下段 3 行
旦那方ちとめし上り	ませ		茶や男喜七	恵世ものかたり	1782	42	下段 14 行
お書つけなされ	ませ	と	女郎ひさ	恵世ものかたり	1782	43	上段 3 行
サアあたたかな所を上り	ませ		茶や	柳巷訛言	1783	110	下段 13 行
とふぞ御出被成	ませ		茶や	歌妓琴塩屋之松	1783	213	上段 9 行
茶なりとあがり	ませ		かか	浪花花街今八卦	1784	304	上段 9 行
こちらへいらつしやり	ませ		若い者	甲駈妓談角鶏卵	1784	342	上段 10 行

【洒落本大成第十三卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
おたひらにお召なされ	ませ		舟頭	無駄酸辛甘	1785	136	下段 15 行
是へ御出なさり	ませ		男	契情懐はなし	1785	150	上段 7 行
ちとおすみなさり	ませ		武吉	契情懐はなし	1785	150	下段 6 行
おひとつお上りなはり	ませ		升の男	契情懐はなし	1785	150	下段 9 行
高坐近くへ御つめ下され	ませ	と。	聴衆	粹宇瑠璃	1785	178	下段 1 行
こぜんをあがり	ませ		小ぞう	其あんか	1786	235	上段 4 行
おあがり被成	ませ		亭主市兵へ	短華薬葉	1786	286	上段 9 行
上へ御出被成	ませ		亭主市兵へ	短華薬葉	1786	288	上段 13 行

【洒落本第十四卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
おさわきなさつてくださり	ませ	とねかひまする	ヤリテ	女郎買之癖味増汁	1788	141	上段 15 行
下へいつてころうし	ませ	。	お仲	一目土堤	1788	191	上段 8 行
御出あそばし	ませ		嫁おゆん、 娘分おきせ	一目土堤	1788	195	下段 2 行
ちつとここに御出あそばし	ませ		嫁おゆん	一目土堤	1788	195	下段 3 行
御きげんよふ御休遊し	ませ		下女お春	一目土堤	1788	200	下段 8 行
およふ御出なされ	ませ		およふ	仙台風		266	上段 9 行
およふ御あけなされ	ませ		およふ	仙台風		266	上段 9 行
お心おきなくけしなり	ませ	。	栄次郎	自惚鏡	1789	316	上段 6 行
おやすみなされ	ませ		若者	自惚鏡	1789	324	下段 9 行
御見物なされ	ませ		女房	志羅川夜船	1789	338	上段 5 行
ちつとこちらへお出なされ	ませ	といところを	茶やの男	志羅川夜船	1789	338	上段 14 行

【洒落本大成第十五卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
コレ御らうじ	ませ	。	宋江	通気粹語伝	1789	40	下段 1 行
ここにまつてござり	ませ	。	高俵	通気粹語伝	1789	42	下段 15 行
お上り遊はし	ませ		若イ衆	駅路雀	1789	78	上段 3 行
すぐにお見立遊ばし	ませ	。	若イ衆	駅路雀	1789	78	上段 7 行
あちらへ入ラツしやい	ませ		若イ衆	駅路雀	1789	79	下段 12 行
二階へ入ラツしやい	ませ		女とも	駅路雀	1789	80	上段 5 行
およびなされ	ませ	。	石橋の若者	駅路雀	1789	81	下段 13 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
御手紙でもつかわされ	ませ		吉兵へ	駅路雀	1789	82	下段 13 行
ちとあちらへ入ラツしやい	ませ		若者	駅路雀	1789	84	下段 4 行
おゆしなされ	ませ	と出るは。	滝田屋お千代	破紙子	1790	185	上段 10 行
おゆるしなされ	ませ	としきを隔て	男	破紙子	1790	194	下段 14 行
死ね死に	ませ	よの心中が。	作者	破紙子	1790	197	下段 11 行
こちらへおよりなすつてくたされ	ませ		若者	文選臥坐		293	上段 8 行
お早ふお出なされ	ませ		若者	文選臥坐		296	下段 16 行
サア旦那めし	ませ		千こう	面美多通身		321	上段 8 行

【洒落本大成第十六巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
ここにおきめなされ	ませ	さうこういたすうち	茶屋男	娼妓絹籠	1791	46	下段 14 行
お出なされ	ませ		およね	北華通情	1794	202	上段 6 行
御取斗ひ被成てくたさり	ませ	と	免石	老子興	1795	223	上段 11 行
お茶あかり	ませ		小めろ	老子興	1795	226	上段 1 行
お休みなされ	ませ		如東	仮根草	1796	269	下段 15 行
少時休み被成	ませ	と客への挨拶。	中居	裸百貫	1796	287	上段 2 行
お茶あがり	ませ		お北	天岩戸		320	下段 2 行
御見物にお出なされ	ませ		中居まんの	天岩戸		320	下段 11 行
こふお出なされ	ませ		中居キク	天岩戸		324	下段 6 行

【洒落本大成第十七巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
あちらへきておくれなさり	ませ		たく	うかれ草紙	1797	64	上段 8 行
マアげしなり	ませ		たいこもちへこ 七	郭通遊子	1797	76	上段 12 行
すぐに見立あそばし	ませ		若者当次	津国毛及	1798	206	上段 15 行
モシちとおゆるしなさり	ませ	エ、	妙光	廓節要	1798	209	下段 9 行
呼ばしやつて下さり	ませ		妙光	廓節要	1798	209	下段 10 行
こちらへ御あがりなされ	ませ	ト	若者当次	廓節要	1798	209	下段 11 行
おあがりなされ	ませ	ト最中の月	五六七	客物語	1799	274	上段 6 行
御保養なされ	ませ		五六七	客物語	1799	274	上段 14 行
およしなされ	ませ		五六七	客物語	1799	274	下段 4 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
かくして御出なされ	ませ	。	五六七	客物語	1799	274	下段 12 行
もちとうきうきなさり	ませ		五六七	客物語	1799	275	上段 7 行
これこらうじ	ませ	と云て	客	粹学問	1799	319	下段 12 行
御調達下さり	ませ	としやくりツ	妓館の亭主	粹学問	1799	323	下段 15 行
こちらへ御あがりなされ	ませ	ト	若者当次	廓節要	1798	209	下段 11 行
おあがりなされ	ませ	ト最中の月	五六七	客物語	1799	274	上段 6 行
御保養なされ	ませ		五六七	客物語	1799	274	上段 14 行
およしなされ	ませ		五六七	客物語	1799	274	下段 4 行
かくして御出なされ	ませ	。	五六七	客物語	1799	274	下段 12 行
もちとうきうきなさり	ませ		五六七	客物語	1799	275	上段 7 行
これこらうじ	ませ	と云て	客	粹学問	1799	319	下段 12 行
御調達下さり	ませ	としやくりツ	妓館の亭主	粹学問	1799	323	下段 15 行

【洒落本大成第十八巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
何事も御すまし下され	ませ	と段々分て	請人	身体山吹色	1799	39	上段 3 行
そんならさふいひ直し	ませ	よ	万吉	身体山吹色	1799	46	下段 7 行
お花さん一寸上	ませ	よ	万吉	身体山吹色	1799	48	下段 9 行
サアお上りなされ	ませ		中居衆	身体山吹色	1799	50	上段 5 行
金の番して居さしやり	ませ		親父殿	身体山吹色	1799	53	下段 1 行
わしが得といひ聞かし	ませ	よ	万吉	身体山吹色	1799	57	下段 5 行
皆万吉のものじやさふ思ふてもらひ	ませ	よ	祖母	身体山吹色	1799	57	下段 14 行
お見立に被成	ませ		茶ヤ男	大通契語	1800	147	下段 5 行
鳥渡御見立被成	ませ		茶ヤ男	大通契語	1800	148	上段 9 行
ちとお休被成	ませ		茶ヤ男	大通契語	1800	149	上段 17 行
お休なされ	ませ		茶ヤ男	大通契語	1800	154	下段 3 行
旦那いらつしやり	ませ	とうやもふ	花の街の 男女	通俗子	1800	163	上段 8 行
マア二階へお出遊ばし	ませ		お熊	南遊記	1800	183	下段 8 行
あちらへお出なされ	ませ	と羽織をぬがせ	お熊	南遊記	1800	186	上段 4 行
是とお着かへなされ	ませ		貴夕	南遊記	1800	186	上段 9 行
あなたもお上りなさり	ませ		中姥	南遊記	1800	189	下段 5 行
チツトお出なされて下さり	ませ		中姥	南遊記	1800	190	上段 3 行
よくつもつてごらうじ	ませ		うば	白狐通	1800	215	上段 11 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
だまつてお出なさり	ませ		西助	南門鼠	1800	320	下段7行
一ふくお上りなされ	ませ		卯兵へ	軽世界四十八手	1800	352	上段13行
おいで遊ばし	ませ		直	軽世界四十八手	1800	352	下段7行
ちとおあがりなされ	ませ	ト世話やく	直	軽世界四十八手	1800	352	下段9行
先お上りなされ	ませ		直	軽世界四十八手	1800	352	下段12行
どふぞおゆるされ	ませ		卯兵へ	軽世界四十八手	1800	354	下段9行

【洒落本大成第十九巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
サア御上り被成	ませ		宗匠	昇平楽	1800	67	上段17行
御通り被成	ませ		綾栗	昇平楽	1800	67	下段1行
マア御つめ被成	ませ	と互挨拶一順すむ	有銭	昇平楽	1800	67	下段1行
今宵は茶に被成	ませ		綾栗	昇平楽	1800	72	下段2行
ころふし	ませ	口のへらぬ事を申ます	けいしや	廓写絵		257	上段11行
お出なさり	ませ	と門前さしていそきゆく	ごん	契情実之巻		268	下段9行
御保養なされ	ませ		五助	面美知之煙		370	下段7行

【洒落本大成第二十巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
おくへいらつしやり	ませ		茶ヤ	恵比良濃梅	1801	15	上段7行
いらつしやり	ませ	トつれてはいる	若者	恵比良濃梅	1801	16	下段9行
ひとつめしあがり	ませ		若者	恵比良濃梅	1801	17	上段4行
およしなされ	ませ	といふくらいで	水狂	色講釈	1801	35	下段6行
もしちとおあがりなされ	ませ		若者	色講釈	1801	37	上段9行
御ゆるされ	ませ		職人	善玉先生大通論	1801	146	上段1行
御ゆるし下さり	ませ		美人	善玉先生大通論	1801	151	上段1行
御らふじて下さり	ませ		美人	善玉先生大通論	1801	151	下段5行
御伝受なされて下さり	ませ		娘	善玉先生大通論	1801	153	上段1行
御ゆるし下さり	ませ	と出たるは	年故歌妓	善玉先生大通論	1801	162	上段1行
御きかせくださり	ませ		年故歌妓	善玉先生大通論	1801	162	上段13行
自慢をつけてあがり	ませ	と。	筆者	塾良玉子	1801	271	上段10行
ちとおよりなされ	ませ		女ほう	塾良玉子	1801	275	下段14行
ちと私かたへもいらつしやり	ませ		九平次	塾良玉子	1801	276	上段14行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
サアいらつしやり	ませ		九平次	埜良玉子	1801	276	下段 3 行
サアおいでなされ	ませ		九平次	埜良玉子	1801	278	上段 10 行
サア入らつしやり	ませ	トつれてはいる	九平次	埜良玉子	1801	278	上段 11 行
お出あそはし	ませ		藤重	雨夜嘶	1801	338	上段 9 行

【洒落本大成第二十一巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
サアこふいらつしやい	ませ	となりざしきのうた	若者	商内神	1802	17	上段 17 行
又いらつしやい	ませ		若者	商内神	1802	22	上段 14 行
マアあなたちとお上りなされ	ませ		喜助	穴可至子	1802	35	上段 12 行
マア御上りなされ	ませ		長滝屋の女房	穴可至子	1802	35	上段 14 行
マア御上り被成	ませ		若衆	穴可至子	1802	36	上段 10 行
御尅ツ上り	ませ		若衆	穴可至子	1802	36	上段 16 行
チトおはじめなされ	ませ		若衆	穴可至子	1802	36	下段 9 行
こつちらへいらつしやい	ませ	トなかのまへ	女房	狐寶這入	1802	59	下段 6 行
チトおはじめなされにかいへ いらつしやい	ませ		女房	狐寶這入	1802	60	上段 1 行
ひとつめしあがつて。おけへ りなさい	ませ	。	ていしゆ	狐寶這入	1802	60	上段 3 行
おふみでもおあげなさい	ませ		女房	狐寶這入	1802	63	上段 8 行
ちとあちらへ。いらつしやり	ませ		若者	後編遊治郎	1802	110	下段 9 行
是切にして下さり	ませ	。	書肆	吉原談話	1802	204	下段 7 行
コレ御ろうじ	ませ	。	おやを	(おおごと に塵) 意気地	1802	216	下段 11 行
コレ御ろうじ	ませ	。	おやを	(おおごと に塵) 意気地	1802	217	上段 3 行
便をなさってください	ませ	。	おやを	(おおごと に塵) 意気地	1802	218	上段 1 行
おかぶりなさらぬよふになさ れ	ませ	。	ちや屋娘おかく	(おおごと に塵) 意気地	1802	219	下段 17 行
もふあなたお休みなさい	ませ		お浪	(おおごと に塵) 意気地	1802	227	上段 13 行
もふあつちらへ。いらつしや い	ませ	ト此内おもてのかた。	太吉	竅学問	1802	272	下段 9 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
おあづけなさつて。下さい	ませ	。	与六	察学問	1802	274	上段 2 行
おあづけなさつて下さい	ませ	。	与六	察学問	1802	274	上段 12 行
おかしなさつて下さい	ませ	。	与六	察学問	1802	274	上段 17 行
いらつしやい	ませ		与六	察学問	1802	275	上段 11 行
マアしづかにおつしやり	ませ	。	次助	察学問	1802	279	下段 1 行
マアしづかになさつて下さい	ませ	。	次助	察学問	1802	279	下段 8 行
お休みなさい	ませ		次助	察学問	1802	280	上段 6 行
いらしつてからの御相談にな さり	ませ		茶やの男	察学問	1802	283	下段 15 行
サアいらつしやい	ませ	ト打つれてはしごをお りると。	茶やの男	察学問	1802	283	下段 17 行
お茶あがり	ませ	と爾云	四方の君子	松の内	1802	355	上段 6 行
サアサア是へいらつしやり	ませ		てい主	松の内	1802	358	上段 10 行
ひとつめしあがり	ませ	ト太郎兵へがまへへ	若者	松の内	1802	364	上段 8 行
こなたへおあげなさい	ませ	トあいかたへさせとい ふ	ちや女房	松の内	1802	364	上段 10 行
おやすみなされ	ませ		ちや女房	松の内	1802	366	下段 17 行
是になされ	ませ	トてうあしのぜんのう へ	ちや女房	松の内	1802	367	下段 3 行
こりよヲおあがりなさい	ませ	トつばやきを	ちや女房	松の内	1802	367	下段 9 行
ちとあちらへいらつしやい	ませ		わかいもの	松の内	1802	368	上段 8 行
お休なさい	ませ		ちや女房	松の内	1802	368	上段 9 行

【洒落本大成第二十二巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
ちとなんぞ。めしあがり	ませ	トこの栄吉。	ちやや女房	素見数子	1802	17	上段 4 行
ハイおさかなをあげましやう。すぐ にめしあがり	ませ		ちやや女房	素見数子	1802	17	上段 13 行
おめしかへなさい	ませ	。	ちやや女房	素見数子	1802	18	上段 2 行
だいじかよてこ	ませ	イヤようつひでなら	薄情	婦足鞠	1802	43	上段 12 行
お目をかけられてください	ませ		磯次郎	婦足鞠	1802	43	下段 14 行
御礼をなアとつくりとおつしやり	ませ	トにつこりしながらい ふ	ゑひも	挑燈藏	1802	75	下段 11 行
わたくしどもにおまかせなされ	ませ		あさき	挑燈藏	1802	75	下段 17 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	
どうぞこちらへいらして下さり	ませ		あさき	挑燈蔵	1802	76	上段9行
マアお待遊ばして下さり	ませ		あさき	挑燈蔵	1802	76	上段15行
マアこちらへお出なさり	ませ	トむりやりに	あさき	挑燈蔵	1802	76	上段17行
おはびを遊ばして下さり	ませ	トなきなきいふ	おかる	挑燈蔵	1802	78	上段3行
ごらんくたさり	ませ	うまつは一鉢	頭取	花折紙	1802	169	上段13行
まつまつおしつまりなされ	ませ		頭取	花折紙	1802	177	上段14行
一寸とお文をおかき遊し	ませ		茂介	魂胆胡蝶枕	1802	187	下段16行
一寸と御ろふじ	ませ	ナ	茶屋よし本女房	夜の錦		227	上段15行
お梅さん召替で御出なせへ	ませ		茶屋よし本女房	夜の錦		227	下段1行
お聞なせへ	ませ	。	茶屋よし本女房	夜の錦		227	下段4行
お出しなせへ	ませ		茶屋よし本女房	夜の錦		228	上段5行
一つお遣ひ。なせへ	ませ		お薦さん	夜の錦		228	上段6行
又のち程御酒になせへ	ませ		茶屋よし本女房	夜の錦		228	上段17行
先だつ不孝もの御ゆるし被成て被下	ませ		秋賀	夜の錦		233	下段2行
これなりともおあがり下さり	ませ		亭主	指南車	1803	275	上段13行
おちやあがり	ませ		茶や女	指南車	1803	275	下段17行
ちとおやすみなさり	ませ		おぞい	指南車	1803	279	下段9行
御機嫌よふおあそびください	ませ		おぞい	指南車	1803	282	上段4行
お機嫌なをしにおつれだいたさ	ませ		おぞい	指南車	1803	285	上段2行
定さんおやすみなされ	ませ	ト行跡はひつそり	おぞい	指南車	1803	285	上段12行

【洒落本大成第二十三巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
千代と。ごろうじなはい	ませ	といいながら走り出すヲ	はつ瀬路	契情実之巻	1804	32	上段3行
いいからおはなしなされ	ませ		権助	契情実之巻	1804	45	下段16行
ハイまあちつとお休なされ	ませ	へ	権助	契情実之巻	1804	47	上段8行
モシ御りやうけんなされ	ませ	おいどで煙草のんだ	のち八	嘘之川	1804	59	下段14行
それでもそばへ寄て御覧じ	ませ	目も鼻もござります	店の男	嘘之川	1804	67	下段15行
サアサアこたつへ御出なさり	ませ		きせ	嘘之川	1804	76	下段11行
それでもしばらくなりともおやすみなさり	ませ		きせ	嘘之川	1804	81	下段17行
左様なら私方へおきそひ下さり	ませ	てうとよい御道筋てこさります	多宮	蝶の世界	1804	93	下段12行
ちとおやすみあそばし	ませ		女房	蝶の世界	1804	96	下段8行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
ちとおやすみあそばし	ませ		女房	蝶の世界	1804	96	下段 8 行
モウ是で御免なされ	ませ	ト顔をしかめて盃をし ため	さの	蓬駅妓談	1805	160	下段 17 行
サアお一ツおあがりなされ	ませ	ト盃とちやうしを持って 来る	下女	駅客娼せん	1805	210	下段 11 行
すんならおやすみなされ	ませ	ト二人なから出て	下女	駅客娼せん	1805	212	上段 10 行
二軒茶屋のふり出し葉となされ	ませ		閑水	うかれ鳥	1805	260	上段 10 行
マア三拾弐文にしてあげ	ませ	よトいうと万八	万八	浮雀遊戯嶋		303	下段 12 行
いかさま一首やり	ませ	よト燈明場より見わた せば	お亀	浮雀遊戯嶋		307	下段 7 行

【洒落本大成第二十四巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
御出なされ	ませ	を	(例)	船頭深話	1806	87	上段 12 行
おいでなされ	ませ	この梅といふは女房の事也	八兵へ	通言東至船		137	下段 5 行
ハイおかぶりなされ	ませ		八兵へ	通言東至船		138	下段 6 行
なんだへだまつてねなはい	ませ	何にもそんねエにいなは る	八重	通言東至船		142	下段 2 行
しづかにおつしやり	ませ	さきほどより承りましたが	女	通言東至船		143	下段 15 行
サアサアお出なされ	ませ		万蔵	一文塊	1807	151	下段 3 行
御覧なされ	ませ		万蔵	一文塊	1807	151	下段 16 行
マア御出なされ	ませ	ト万蔵は。	万蔵	一文塊	1807	158	上段 2 行
よう御覧じ	ませ	へ	万蔵	一文塊	1807	162	下段 2 行
外の太夫さんがたに。しな	ませ		仲居おちか	一文塊	1807	162	下段 17 行
外のにしな	ませ	ト三五兵へ聞て。	仲居おちか	一文塊	1807	163	下段 2 行
おちか新造●ンはやう留	ませ		三五兵へ	一文塊	1807	163	下段 11 行
ほしがらしやる楊枝じや。 あげ	ませ		万蔵	一文塊	1807	164	上段 12 行
しやうねじや。あげ	ませ		万蔵	一文塊	1807	164	上段 14 行
あげ	ませ		万蔵	一文塊	1807	164	上段 15 行
おやすみなされ	ませ		万蔵	一文塊	1807	166	上段 13 行
藤●何分御聞濟下され	ませ	只今申ました通り	その	通客一盃記言	1807	182	下段 2 行
ごかにんなさい	ませ		周吉	通客一盃記言	1807	182	下段 15 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
今日はおかし下さり	ませ		酒や	(あなかんむり の中、左に下に 未、右に禺)潜妻	1807	208	下段 5 行
左様思し召て下さり	ませ		秋風	(あなかんむり の中、左に下に 未、右に禺)潜妻	1807	214	下段 1 行
どふぞ間違ぬやうなされ	ませ	もし晩が間違と	家主	(あなかんむり の中、左に下に 未、右に禺)潜妻	1807	214	下段 2 行
是ごろふし	ませ	ト受取の帳面ひろ げて	治助	(あなかんむり の中、左に下に 未、右に禺)潜妻	1807	216	下段 7 行
うけとりを下さり	ませ	ト	男	(あなかんむり の中、左に下に 未、右に禺)潜妻	1807	217	上段 4 行
モンそれはだますに被 成	ませ	それほどのおいた ほりが	芸者	当世廓中掃除	1807	308	上段 17 行
おぬしの身になつてご らうじ	ませ	それならこそ昔の 事	芸者	当世廓中掃除	1807	311	下段 4 行
ちと御心得被成	ませ		芸者	当世廓中掃除	1807	317	上段 16 行
細ふ長ふ御遊び下され	ませ	とは青楼の最期挨 拶と	客	当世廓中掃除	1807	326	下段 1 行

【洒落本第二十五巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
まつちとおやすみなされ	ませ		亭主	北系兵庫結	1808	25	下段 14 行
御覧なすてくたさり	ませ	おまへん	帯屋	箴の千言	1812	119	上段 7 行
御持なすてくたさり	ませ	と呑て又さすに	帯屋	箴の千言	1812	120	下段 16 行
ハイお帰りなされ	ませ		皆々	愛敬鶏子	1813	188	下段 5 行
お尋なさつて。下さり	ませ		中居とよ	左登能花		192	上段 10 行
さうおつしやつてくださり	ませ	と目をのこしていぬ。	兵介	左登能花		201	下段 9 行
ちとおしつかになさり	ませ		仲居	南楼丸一之巻	1814	253	下段 3 行
ちとおやすみなさり	ませ	ト此内おやまはさすが	仲居	南楼丸一之巻	1814	253	下段 16 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
さやうならお出おそばし	ませ		女房	くるわの茶番	1815	262	下段 8 行
マア御用心なされ	ませ		万里	青楼籬の花	1817	334	上段 11 行
それごらうじ	ませ	そこらが用心をする所だネ	万里	青楼籬の花	1817	334	上段 13 行
左様ならさうなされてくださり	ませ	さやうござりませんと	大介	青楼籬の花	1817	341	下段 9 行
ヲヤ忠兵へさんいらつしやり	ませ		お仲	青楼籬の花	1817	345	上段 7 行
お久しぶりーつめし上り	ませ		お仲	青楼籬の花	1817	345	上段 14 行

【洒落本大成第二十六巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
此文をたしかにおあげなすつて下さり	ませ	といひすてて	女	傾城買鬚筆		24	上段 8 行
旦那に直しておもらひなされ	ませ		帮間	洒落文台		52	上段 17 行
外聞わるみなよつてしろものにしなされ	ませ		中居	洒落文台		53	上段 4 行
状のやうに御書なされ	ませ		帮間	洒落文台		53	上段 12 行
そこへよみ上ておくれなされ	ませ		帮間	洒落文台		53	上段 17 行
入つしやり	ませ	トひざをーつとんと	亀吉	廓宇久為寿	1818	148	上段 17 行
突当てコレごらうじ	ませ	。	たいこもちまんり	廓宇久為寿	1818	149	下段 7 行
入らつしやり	ませ	トさきに立てあんないし	若衆	廓宇久為寿	1818	150	上段 3 行
まづーつめしあかり	ませ		たいこもちまんり	廓宇久為寿	1818	150	上段 16 行
入らつしやり	ませ	ト忠兵へをさきにたてて	亀吉	廓宇久為寿	1818	152	上段 3 行
おゆるしなされて下さり	ませ		六三郎	婦身嘘	1820	233	上段 10 行
サアサア近ふおより被成	ませ		頭取	座敷の粧ひ	1820	324	10 行

【洒落本大成第二十七巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
旦那一文下ダさり	ませ	と地びたにひれふし	猪三郎	青楼快談玉野語言	1822	109	下段 11 行
旦那さんあちらでおやすみなされ	ませ		お七	箱まくら	1822	119	上段 12 行
これへおやすみなされ	ませ	トべうぶを引まはず	お七	箱まくら	1822	119	上段 15 行
サアーつめし上り	ませ	。	与六	青楼曙草		237	下段 12 行
みうらやへ入らつしやり	ませ		与六	青楼曙草		241	下段 13 行
サア入らつしやり	ませ	となりのニかいざしきにて	与六	青楼曙草		242	上段 7 行
心に怨みをおつしやり	ませ	。	算六	花街寿々女		274	下段 15 行
さア入らせられ	ませ	ト画人立。	算六	花街寿々女		276	下段 13 行
サアサアめしあがり	ませ		三介	花街寿々女		280	下段 6 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名			
サアこれにておもひ切て下さり	ませ		高瀬清吉	色深徠睡夢	327	上段 17 行	
御娘さまと御祝言なされ	ませ		柳助	色深徠睡夢	327	下段 14 行	
もうしおゆるしなされ	ませ	。	男	北川観殻	1827	354	下段 7 行
吉さんおはいりなされ	ませ	トいふこゑに	男	北川観殻	1827	355	下段 14 行

【洒落本大成第二十八巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
さあさあお上りなされ	ませ	と時二か手を取り	女房	新宿洒落梅ノ婦咲	1827	14	下段 1 行
となたも些とお休みなさい	ませ		女房	新宿洒落梅ノ婦咲	1827	16	下段 15 行
四人奈からお休みなされ	ませ	若ひものきたり	女芸者	新宿洒落梅ノ婦咲	1827	16	下段 16 行
屏風引廻し些おやすみなされ	ませ	と時二か手を取り云出て行	若ひもの	新宿洒落梅ノ婦咲	1827	16	下段 17 行
お座敷へいらつしやい	ませ	と云内あい方の女郎二人	女房	新宿洒落梅ノ婦咲	1827	17	上段 2 行
旦那玲のを一つおやりなされ	ませ	十分気のあだに	伊兵へ	麗小紋	1828	102	下段 8 行
とふぞ御覧しやつて下さり	ませ	トたちにかかるを	中居	麗小紋	1828	104	下段 15 行
それはあの子二逢てお聞なされ	ませ	一寸よびましよふト	中居	麗小紋	1828	105	上段 8 行
サア中宿へおあがりなされ	ませ		船頭	潮来婦志	1829	135	上段 13 行
二階サおあがりなされ	ませ		家内の者	潮来婦志	1829	135	上段 14 行
さやうなら御機嫌ようおそべりなされ	ませ	。	中宿	潮来婦志	1829	142	下段 15 行
マアここサはなさつしやり	ませ		枝川	潮来婦志後編		165	下段 12 行
髪を切たを一通り間ツしやり	ませ	。	枝川	潮来婦志後編		166	上段 13 行
モン是で精をおつけなされ	ませ		中宿	潮来婦志後編		168	上段 16 行
サアお上りなされ	ませ		カカア	後家集		286	下段 8 行
ここにお出なされ	ませ	あねそんがいやしかるか	カカア	後家集		288	上段 8 行
そんならおつれもふしなされ	ませ		コケ	後家集		288	上段 14 行
さよふなら御やすみなされ	ませ		カカア	後家集		288	下段 8 行
そんならおやすみなされ	ませ	あとは客人とさしむかへで	コケ	後家集		288	下段 8 行
おちやつけを御上りなされ	ませ	といふ	コケ	後家集		289	上段 2 行
いやーせん御上りなされ	ませ	てうあしのせんにちやわん	コケ	後家集		289	上段 3 行
サア御出なされ	ませ	御あんなへ致します	カカア	後家集		290	上段 5 行
サア御客おひとつ御上りなされ	ませ		アケヤ亭主	後家集		290	下段 1 行
どふぞ御心やすく御出なされ	ませ	といふうちニ	カカア	後家集		291	下段 11 行
これ見ておくれなされ	ませ	ト。	小楼	老楼志	1831	320	8 行
しらして御らうじ	ませ		お清	老楼志	1831	322	上段 17 行
おくれなされ	ませ		お清	老楼志	1831	325	上段 16 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
サアまあ御敷なさり	ませ	。	お清	老樓志	1831	325	下段 4 行
證故を見せておくれなさり	ませ		人汲	老樓志	1831	335	上段 10 行
一寸見せておくれなされ	ませ	。	人汲	老樓志	1831	335	下段 3 行
みんな聞ておくれなされ	ませ	イ、	人汲	老樓志	1831	337	上段 13 行
若旦那。まあまあ御待なさり	ませ	。	半七	老樓志	1831	343	上段 7 行
まあ気を定めて下さり	ませ	。	半七	老樓志	1831	343	上段 8 行
少し気を定めさせ	ませ	。	花車	老樓志	1831	343	下段 5 行
夫ならどふござうしておくれなさり	ませ		綾	老樓志	1831	356	上段 4 行

【洒落本大成第二十九卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
露になぬれそめし	ませ	と、いづくの里にも	筆者	つづれの錦	1836	100	下段 3 行
マアお上りなされ	ませ	と。	奥方	風俗三石士	1844	275	1 行
マア御羽織をおとりなされ	ませ	。	婆様	風俗三石士	1844	275	2 行
先度もきいて下さり	ませ	。	婆様	風俗三石士	1844	276	上段 1 行
ハイお早う御帰りなされ	ませ	。	女房	風俗三石士	1844	278	下段 10 行
へい御ゆるされ	ませ	。	料理人	風俗三石士	1844	280	上段 11 行
へいまづ御上りなさり	ませ	。	料理人	風俗三石士	1844	280	上段 12 行
奥の牀几へ御出なさり	ませ	。	若者	風俗三石士	1844	281	下段 17 行
さやうなら御序に遣はされ	ませ	と。	男	風俗三石士	1844	282	下段 9 行
おつしやつて下さり	ませ	。	婆様	風俗三石士	1844	284	上段 9 行
どふぞお早うつかはされ下さり	ませ	。	婆様	風俗三石士	1844	284	下段 3 行
おほりなさつて下さり	ませ	。	婆様	風俗三石士	1844	284	下段 15 行
ハイ御出なされ	ませ	。	ちか	風俗三石士	1844	284	下段 16 行
となたもマアおは入なされ	ませ	。	女房	風俗三石士	1844	290	上段 4 行
ハアアイおとまりなされ	ませ		女房	風俗三石士	1844	290	上段 5 行

「マシ」【洒落本大成第六卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
さあ皆様へお出なさり	まし	里こつちへ。	若い男(店)	南閨雑話	1773	46	下段 10 行
懸られまして。下さり	まし	女郎共太夫さん。	芸妓	南閨雑話	1773	48	上段 11 行
あちらへ御出遊し	まし	。	若い男(店)	南閨雑話	1773	49	上段 1 行
左様なら御やすみ。遊し	まし	沢ゆるりと歌もふ。	長七(客)	南閨雑話	1773	52	上段 2 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
煙草でもすふて休	まし		白梅上人	風流醉談議一之巻	1774	106	上段 5 行
まづおあがりあそばし	まし		ヤフヒコ	古今馬鹿集	1774	168	下段 8 行
さあおあがりなさり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	297	上段 10 行
ちつとお待なさり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	297	上段 13 行
後なにおよしなさり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	297	下段 10 行
サアお一つ上り	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	297	下段 12 行
お肴をお取なさり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	297	下段 15 行
サアお上りなさり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	297	下段 17 行
ハイ左様ならおゆるし。なさり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	299	上段 12 行
御ろうじ	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	299	上段 13 行
さあお出なさり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	299	下段 6 行
夫ともお見立なさらばお見立なさり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	299	下段 13 行
そんならお見立に。なさり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	299	下段 17 行
お出なさり	まし		若イもの半兵へ	甲斐新話	1775	300	上段 2 行
サアお上りなさり	まし	と先へ立て二かみへ	若イもの半兵へ	甲斐新話	1775	300	上段 9 行
さあ是へおほりなさり	まし	。	若イもの半兵へ	甲斐新話	1775	300	上段 11 行
どなたも緩りとあがり	まし		若イもの半兵へ	甲斐新話	1775	301	上段 11 行
サアお吸なさり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	301	上段 13 行
左様ならそのびわを下さり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	301	下段 1 行
イイエ愛へ下さり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	301	下段 4 行
そんなら是をあがつて御ろうじ	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	302	上段 1 行
さあお出しなさり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	302	上段 15 行
お茶漬に。なすつてあがり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	302	下段 10 行
よふあがり	まし	。	若イもの半兵へ	甲斐新話	1775	302	下段 11 行
おかへなさり	まし	。	若イもの半兵へ	甲斐新話	1775	302	下段 12 行
たんと上り	まし	。	坂見屋の後家	甲斐新話	1775	303	上段 2 行
チトあちらへ。お出なさり	まし		若イもの半兵へ	甲斐新話	1775	303	下段 5 行
お出なさり	まし		若イもの半兵へ	甲斐新話	1775	303	下段 9 行
サアお上りなさり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	310	下段 8 行
煮ばなを。一つあがり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	310	下段 9 行
お出なさり	まし		坂見屋の後家	甲斐新話	1775	310	下段 13 行

【洒落本大成第七卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
イヤちとおまちなされ	まし		男	穴知島	1777	147	上段 2 行
エエイ御上りなされ	まし		若者源兵衛	穴知島	1777	150	上段 13 行
サアこつちへおいでなさり	まし		若者源兵衛	穴知島	1777	151	上段 4 行
イエ先上り	まし		喜七	穴知島	1777	151	上段 7 行
そんならちとおかけなされ	まし		後家	穴知島	1777	151	下段 3 行
ちとお上りなさり	まし		船宿の若イ者藤兵衛	穴知島	1777	152	下段 11 行
柏屋になさり	まし		後家	通志選		163	下段 14 行
右へおよりなされ	まし	といふを	清考大喜後家	通志選		164	下段 10 行
イヤちとおまちなされ	まし		船宿の男	通志選		165	下段 6 行
サアそんならおはいりなされ	まし	ト先へ立て	後家	通志選		168	下段 15 行
エエイ御上りなされ	まし		若者源兵衛	通志選		168	下段 16 行
サアこつちへおいでなさり	まし		若者源兵衛	通志選		169	下段 7 行
イエ先上り	まし		喜七	通志選		169	下段 10 行
そんならちとおかけなされ	まし		後家	通志選		170	上段 6 行
ちとお上りなさり	まし		船宿の若イ者藤兵衛	通志選		171	上段 14 行
サアあつちいおいでなさり	まし		若イ者十蔵	世説新語茶		250	上段 3 行
御きげんよくおより	まし		若イ者十蔵	世説新語茶		251	下段 3 行
今夜の事は私に下さり	まし		若イ者十蔵	世説新語茶		251	下段 8 行
いか様さやうなさり	まし		通人希山	広街一寸間遊		261	下段 8 行
おあがり。なされ	まし		佐二	広街一寸間遊		262	下段 13 行
ちつとおよりなさり	まし	。	かみ	契情買虎之巻		310	上段 14 行
みんなあつちが十わり	まし	。	芸者衆土ぼしのかう	淫女皮肉論		336	下段 6 行
鯛より御はこひ	まし		鮮魚衆鳥凡青	三幅対		351	下段 13 行

【洒落本大成第八卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
これからちつとお出なさり	まし		女房	深淵情	1803	130	下段 16 行
お出なさり	まし		女房	深淵情	1803	130	下段 17 行
マアおしづかになさい	まし		吉	深淵情	1803	131	上段 11 行
サアこちらへお出なさり	まし		女房	深淵情	1803	131	下段 10 行
おいらんのお見たてをなさり	まし		女房	深淵情	1803	132	上段 8 行
御出なさり	まし		女房	深淵情	1803	132	上段 9 行
サアお出なさり	まし	な	女房	深淵情	1803	134	下段 5 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
お出なさり	まし		主人	深淵情	1803	134	下段 7 行
サアここで一ふくおあかりなさり	まし		長さん	深淵情	1803	135	上段 4 行
またおとでおあかりなさひ	まし		長さん	深淵情	1803	135	上段 9 行
おけへりなさひ	まし		長さん	深淵情	1803	135	下段 11 行
左様なら御めんなさり	まし		清考大喜後家	深淵情	1803	136	上段 7 行
おいらんなすつて下さり	まし		千雀	深淵情	1803	140	上段 13 行
おつひなすつて下さひ	まし		白老母跡	深淵情	1803	140	下段 17 行
コフなすつて下さり	まし		若もの	深淵情	1803	142	上段 12 行
こちらへお出なさひ	まし		白老母跡	深淵情	1803	143	上段 12 行
マアママおしづかになさり	まし		白老母跡	深淵情	1803	143	下段 5 行
おすわりなさい	まし		白老母跡	深淵情	1803	143	下段 14 行
おつしやり	まし		蛾山若者	深淵情	1803	143	下段 17 行
サアお上りなさい	まし		若い者伊八	深川新話		217	上段 6 行
一盃つぎました御ろうじ	まし		中居その	深川新話		219	下段 12 行
サア御ぜんを上り	まし		中居その	深川新話		221	上段 1 行
お茶漬にでもなすつて上り	まし		中居その	深川新話		221	上段 5 行
どれどれサアお茶づけになさり	まし		中居その	深川新話		221	上段 12 行
もふちつと上り	まし		中居その	深川新話		221	上段 15 行
わたしに下さり	まし		舟頭安	深川新話		226	上段 9 行
サアお上りなさり	まし	。	舟頭	家暮長命四季物語	1779	252	下段 6 行
サアおあがんなさり	まし	。	そで	家暮長命四季物語	1779	252	下段 7 行
さあおのりなさり	まし		ぼう組	呼子鳥	1779	261	上段 3 行
壺文ください	まし		すたすた	呼子鳥	1779	269	上段 11 行
しかうさんちとあげ	まし	よ	花車	風流裸人形		275	下段 6 行
おあいいたし	まし	よ	げい子	風流裸人形		275	下段 7 行
そのくわたいにかさねて下され	まし	よ	たいこ持	風流裸人形		276	上段 8 行
申シてつかわし	まし	よ。	花車	風流裸人形		276	下段 1 行
おさかづきまわし	まし	よ。	花車	風流裸人形		276	下段 8 行
おあつかり申シ	まし	よ	花車	風流裸人形		276	下段 10 行
おとをりなさり	まし		男	竜虎問答	1779	346	上段 14 行

【洒落本大成第九卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
サア上り	まし		亭主	駅舎三友	1779	70	上段 3 行
お聞なさみ	まし		若者善二	駅舎三友	1779	70	上段 11 行
にいらつしやい	まし		雷尾	駅舎三友	1779	70	下段 7 行
お出被成	まし	と立出ル	若者善二	駅舎三友	1779	70	下段 13 行
御膳を上り	まし		若者善二	駅舎三友	1779	73	上段 7 行
サアお吸なさり	まし		茶屋新助	粹町甲圍	1779	83	下段 17 行
お出なすつて下さり	まし		伊八	粹町甲圍	1779	88	下段 17 行
かならず御出なさり	まし		伊八	粹町甲圍	1779	89	上段 5 行
一盃ぶり下さり	まし		かごかき	南客先生文集		97	下段 5 行
御出なさり	まし		若イ者源兵衛	南客先生文集		85	上段 17 行
お二階へお出なさり	まし		次介	南客先生文集		105	下段 8 行
モウお出なされ	まし	よ	栄三	初葉南志	1780	226	上段 7 行
こなたへおとをりなされ	まし	と	案内	風流仙婦伝	1780	276	上段 10 行

【洒落本大成第十卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
繩目を御解きなされて下さり	まし	と祈りければ	お喜久	大通俗一騎夜行	1780	40	下段 13 行
趣向をお聞なされ	まし	と言ば	小女	大通俗一騎夜行	1780	49	下段 4 行
客にはおしげりなされ	まし	と云も	女郎	口学諺種	1780	89	上段 2 行
一ツこん召上られ	まし		若者	風俗砂払伝	1780	121	下段 7 行
まづおとりあげ遊し	まし		源七	娼註鏡子戯語	1780	154	上段 14 行
一トツおあかり遊し	まし		源七	娼註鏡子戯語	1780	157	上段 2 行
あちらへ御入遊し	まし		巴や若者	娼註鏡子戯語	1780	157	上段 3 行
さうして置なさり	まし		津川の女さき	軽井茶話道中粋語録		223	上段 4 行
こつちらへきさつしやり	まし		子共初	軽井茶話道中粋語録		223	上段 6 行
打遣て置つしやり	まし		子共初	軽井茶話道中粋語録		223	上段 7 行
お置なさり	まし		津川の女さき	軽井茶話道中粋語録		223	下段 2 行
さあお出なさり	まし		津川の女さき	軽井茶話道中粋語録		223	下段 8 行
風呂へおはみりなさり	まし	な	津川の女さき	軽井茶話道中粋語録		224	下段 11 行
サア来さつしやり	まし		子共初	軽井茶話道中粋語録		224	下段 13 行
ナニよさつしやり	まし		苺藻	軽井茶話道中粋語録		224	下段 15 行
水いらずに御咄しなさり	まし		津川の女さき	軽井茶話道中粋語録		225	上段 1 行
そんだらゆるさつしやり	まし	どうで	苺藻	軽井茶話道中粋語録		225	上段 8 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
寐て見さつしやり	まし		苺藻	軽井茶話道中粋語録		225	上段 10 行
さうなさり	まし		津川の女さき	軽井茶話道中粋語録		225	下段 15 行
サア替さつしやり	まし		浮草	軽井茶話道中粋語録		226	上段 7 行
お前もくはつしやり	まし		浮草	軽井茶話道中粋語録		226	下段 6 行
お食を替さつしやり	まし		子共初	軽井茶話道中粋語録		226	下段 11 行
何ぞ替さつしやり	まし		苺藻	軽井茶話道中粋語録		226	下段 15 行
お前がたそべらつしやり	まし	な	苺藻	軽井茶話道中粋語録		227	下段 4 行
聞つしやり	まし		浮草	軽井茶話道中粋語録		228	上段 9 行
こつちらい寄つしやり	まし	な	浮草	軽井茶話道中粋語録		228	上段 15 行
さあ解つしやり	まし		浮草	軽井茶話道中粋語録		228	上段 16 行
見ささつしやり	まし		浮草	軽井茶話道中粋語録		228	上段 17 行
あつためて呉さつしやり	まし		苺藻	軽井茶話道中粋語録		228	下段 13 行
帯ノウとかつしやり	まし		苺藻	軽井茶話道中粋語録		229	上段 2 行
おもつてくれさつしやり	まし		苺藻	軽井茶話道中粋語録		229	上段 10 行
寄てねさつしやり	まし		苺藻	軽井茶話道中粋語録		229	上段 17 行
好にさつしやり	まし		苺藻	軽井茶話道中粋語録		229	下段 12 行
よさつしやり	まし	な	相方田毎	軽井茶話道中粋語録		229	下段 17 行
どれ見せさつしやり	まし		相方田毎	軽井茶話道中粋語録		230	上段 16 行
よんできけさつしやり	まし		相方田毎	軽井茶話道中粋語録		230	下段 1 行
読つしやり	まし		相方田毎	軽井茶話道中粋語録		230	下段 9 行
見せさつしやり	まし		相方田毎	軽井茶話道中粋語録		230	下段 10 行
見さつしやり	まし		相方田毎	軽井茶話道中粋語録		231	上段 15 行
本とうに起さつしやり	まし	な	相方田毎	軽井茶話道中粋語録		231	下段 9 行
枕アひききしてくれさつしやり	まし		相方田毎	軽井茶話道中粋語録		231	下段 10 行
そんだらきげんよく立つしやり	まし		苺藻、浮草	軽井茶話道中粋語録		232	上段 10 行
おたずねなすつてくださり	まし		津川の女さき	軽井茶話道中粋語録		232	上段 12 行
お静にめし	まし		亭主	軽井茶話道中粋語録		232	上段 13 行
これへお還入なされ	まし		河桃	雲井双紙	1781	306	上段 13 行
御出なんしお上りなさり	まし		女房	雲井双紙	1781	307	下段 4 行
何ンとごろうじ	まし		忠七	真女意題	1781	355	上段 1 行
いいかげんになさり	まし	。	忠七	真女意題	1781	355	上段 4 行
高松屋へお出なさり	まし	。	引手若者喜介	真女意題	1781	355	上段 17 行
どちらへなり御出なさり	まし	。	引手若者喜介	真女意題	1781	355	下段 2 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
すふに御出なさり	まし	。	引手若者喜介	真女意題	1781	355	下段 7 行
サアお上りなさり	まし	。	引手若者喜介	真女意題	1781	355	下段 13 行

【洒落本大成第十一巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
よくおつくろひ被成	まし	。	作者	舌講油通汚	1781	17	上段 9 行
お買なさつて。下さり	まし	。	商人	舌講油通汚	1781	18	上段 3 行
此間にお出なさり	まし		平六	鯉池全盛	1782	214	下段 9 行
まあお上りなせエ	まし		忠兵衛	大劇場世界の幕なし		223	上段 8 行
もふおけエンなさり	まし		小僧	大劇場世界の幕なし		226	下段 8 行
おこして下さり	まし		小僧	大劇場世界の幕なし		226	下段 17 行
すぐに御出被成	まし		女房	登美賀遠佳	1782	279	下段 11 行
おかへりなされ	まし		茶や	根津見子楼茂	1782	300	下段 2 行
一ツおすごしなさり	まし	な	民てう	山下珍作	1782	318	下段 1 行

【洒落本大成第十二巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
ちと御すひ遊し	まし		廻方	三教色	1783	131	上段 9 行
御かいなされ	まし		御亭さん	三教色	1783	133	上段 12 行
御つけなされ	まし		御亭さん	三教色	1783	133	上段 14 行
ちとこつちへいらつしやり	まし		廻方	三教色	1783	134	下段 10 行
サア御出なされ	まし		万里	三教色	1783	134	下段 12 行
さあこれへおいで被成	まし		若者	古今無三人連	1783	146	上段 17 行
おあがりなさり	まし		若者	古今無三人連	1783	146	下段 5 行
あつちらへ御出なさり	まし		若者	古今無三人連	1783	148	下段 4 行
お明被成て下さい	まし	エ	ぎう又兵衛	卯地臭意	1783	204	下段 14 行
御りやうけんなすつて下さり	まし		ぎう又兵衛	卯地臭意	1783	205	下段 1 行
サアおあがりなさり	まし		むすめよね	金錦三調伝	1783	222	上段 11 行
おあがりあそばし	まし		むすめよね	金錦三調伝	1783	222	下段 5 行
おひき遊ばし	まし		むすめよね	金錦三調伝	1783	222	下段 13 行
こつちへ御いてなさり	まし		女	金錦三調伝	1783	223	下段 14 行
奥へいらつしやり	まし	。	若イ者	金錦三調伝	1783	224	下段 6 行
サア入らつしやり	まし		若イ者	金錦三調伝	1783	226	上段 7 行
おざしきへおいてなさり	まし		若イ者	金錦三調伝	1783	229	上段 11 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
おみたて直しになさり	まし		若イ者	金錦三調伝	1783	230	上段 11 行
おあがんさい	まし		茶やの女ふく	甲駅妓談角鶏卵	1784	339	上段 6 行
静になすつて下さい	まし		若イ者	甲駅妓談角鶏卵	1784	340	下段 5 行
お咄しあいをなさい	まし	。	お梅	甲駅妓談角鶏卵	1784	340	下段 9 行
二階へお出なさい	まし	。	若イ者	甲駅妓談角鶏卵	1784	340	下段 10 行
おまちなさる	まし		お梅	甲駅妓談角鶏卵	1784	341	上段 10 行
お明なすつて下さる	まし		若イ者	甲駅妓談角鶏卵	1784	342	上段 8 行
おはじめなさい	まし		お梅	甲駅妓談角鶏卵	1784	342	下段 4 行
おあがんさい	まし	ナ	染吉	甲駅妓談角鶏卵	1784	342	下段 8 行

【洒落本大成第十三巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
大先生それから御ろうじ	まし		筆者	浮世の四時	1784	25	上段 6 行
おしづかになさつて下さり	まし	と申ました	八郎兵衛	浮世の四時	1784	26	下段 15 行
へい御ひまで御坐り	まし		久米八	浮世の四時	1784	28	上段 5 行
こちらへお出遊ばし	まし		久米八	浮世の四時	1784	28	上段 7 行
是へお居り被成	まし		久米八	浮世の四時	1784	28	上段 12 行
お一ツめし上り	まし		久米八	浮世の四時	1784	28	上段 15 行
どなたもお休みなせへ	まし	と	露長亀次	深川手習草子	1785	159	上段 15 行
大さんはしからめし	まし	。	女郎	客衆肝照子	1786	213	下段 5 行
おきをお付なさり	まし		女郎	客衆肝照子	1786	213	下段 6 行
おまちなさり	まし		女郎	客衆肝照子	1786	215	上段 1 行
歌をなをして下さり	まし	と	おかみさん	客衆肝照子	1786	219	上段 11 行
おやすみなさり	まし		おゆふ	其あんか	1786	235	下段 3 行
お書なさつて下さり	まし		作者	福神粋語録	1786	294	上段 5 行
写本をお上ケなさつて下さり	まし		板元	福神粋語録	1786	294	上段 9 行
おすい遊し	まし	。	女房	福神粋語録	1786	298	上段 3 行
お手本になさり	まし	。	豊年	福神粋語録	1786	298	上段 14 行
サアいらつしやり	まし	。	亭主	福神粋語録	1786	298	下段 13 行
おはいり遊し	まし	。	三右エ門	福神粋語録	1786	299	上段 15 行
お坐敷へおつれ申なされ	まし		若もの	福神粋語録	1786	300	下段 3 行
あそこへいらつしやり	まし		三右エ門	福神粋語録	1786	300	下段 15 行
讀ンでおきかせなさり	まし		板元	福神粋語録	1786	306	下段 9 行
来て取さへてくれさつしやり	まし	な。	虎化粧坂の少将太鞍	田舎芝居	1787	324	上段 10 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
挨拶のうして呉さつしやり	まし	。	後谷、黒弥五、海野	田舎芝居	1787	324	下段 2 行

【洒落本大成第十四巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
アレごろうじ	まし	。	小女	総籬	1787	39	下段 9 行
ちつとおすいなされ	まし		女房	総籬	1787	49	上段 7 行
さあおいらんお上りなされ	まし		女房	総籬	1787	50	上段 17 行
おくんなさり	まし		茶屋女	総籬	1787	52	上段 9 行
御めんなすつてくださり	まし	と。申付けました。	茶屋男	総籬	1787	52	下段 6 行
ちつとおよりなされ	まし		茶屋男	総籬	1787	57	下段 6 行
サアめし	まし		かご	総籬	1787	58	下段 6 行
もちつとおいれ被成	まし		かご	総籬	1787	58	下段 8 行
一ツ銭下さり	まし		乞食	曾我糠袋	1788	169	上段 11 行
私どものほうへも入らつしやい	まし		豊浜	曾我糠袋	1788	170	下段 12 行
こんと入ラツしやい	まし	。	茶屋女房おさく	曾我糠袋	1788	171	上段 17 行
さやうならもふ入らつしやい	まし	。	茶屋女房おさく	曾我糠袋	1788	171	下段 14 行
モウいらつしやい	まし	。	おいらんたら	曾我糠袋	1788	172	下段 16 行
サアおいでなさい	まし		供のもの	一目土堤	1788	182	上段 13 行
ちつとおはじめなさい	まし		娘分おきせ	一目土堤	1788	196	下段 11 行
おあげなさい	まし		下女お春	一目土堤	1788	197	上段 8 行
サア御出なさい	まし		嫁おゆん	一目土堤	1788	198	下段 4 行
一ツおあがりなせへ	まし		下女お春	一目土堤	1788	200	上段 5 行
御うたひなさい	まし		お花	一目土堤	1788	200	上段 11 行
一ツおあがんせへ	まし		お花	一目土堤	1788	200	上段 17 行
ゆるりつとおしげんなさい	まし		お花	一目土堤	1788	202	上段 9 行
わたくしにおあづけなさい	まし		庄九郎	青楼五雁金	1788	218	下段 9 行
寐ておいでなせへ	まし		庄九郎	青楼五雁金	1788	221	上段 6 行
おしたくをはやくなさい	まし		茶や	青楼五雁金	1788	221	下段 9 行
ちつとおあかりなされ	まし		女房	志羅川夜船	1789	337	上段 12 行
モシおまちなされ	まし	とはおりのゑりを	女房	志羅川夜船	1789	338	上段 7 行
おみたてなされ	まし		若者	志羅川夜船	1789	343	下段 1 行
お出なすつてくださり	まし		若者	志羅川夜船	1789	343	下段 3 行
お一ツあかりなされ	まし		若者	志羅川夜船	1789	344	下段 8 行

【洒落本大成第十五卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
よしてくださり	まし	。	女	通気粋語伝	1789	34	上段 14 行
このへんじはのちにとつてしんぜ	まし	よ。	碑文谷仁王尊	通気粋語伝	1789	44	下段 3 行
御休なさい	まし	といふ声		中洲の花美	1789	53	上段 11 行
だんなとつちそいらツしやへ	まし	。	引手	中洲の花美	1789	56	上段 11 行
御らんなさい	まし		引手	中洲の花美	1789	56	下段 2 行
ちつとおかたんなせへ	まし		鶴次雑次	中洲の花美	1789	57	下段 10 行
又おあいをなすつて下され	まし	。	鶴次雑次	中洲の花美	1789	58	下段 1 行
ちとあつちらへ御出なされ	まし		若者	中洲の花美	1789	58	下段 10 行
サア御出なさい	まし		鶴次雑次	中洲の花美	1789	59	上段 13 行
ちよおすいなさり	まし	ト吸物をたし	茶や	まわし枕	1789	97	下段 12 行
もしちよつとこらうじ	まし	。	五町	摩大帳	1789	113	上段 8 行
左よふさとまねをなさい	まし		おつる	染抜五所紋	1790	178	上段 13 行
どふぞそふなすつてくださへ	まし		京三郎	染抜五所紋	1790	179	上段 15 行
蓋でさし	まし	よ。	中居	破紙子	1790	192	上段 8 行
おさえ	まし	よ。	中居	破紙子	1790	192	上段 9 行
すぐにお休みなされ	まし		茶や女	繁千話	1790	266	下段 4 行
御這入なさり	まし		茶や女	美止女南話	1790	276	下段 10 行
お茶を上り	まし		茶や女	美止女南話	1790	276	下段 17 行
ここで一ツふく上り	まし	。	息子	美止女南話	1790	278	下段 1 行
サアお上り被成	まし		女房	美止女南話	1790	279	上段 14 行
モシお一ツ上り	まし	な	女房	美止女南話	1790	279	下段 16 行
サアまつお上りなされ	まし		若者	文選臥坐		292	下段 14 行
チトおやすみなされ	まし		若者	文選臥坐		294	下段 6 行
サアおあがんなさみ	まし		茶屋男藤七	南品あやつり	1791	334	下段 6 行
へいお茶をめし上り	まし		茶屋男藤七	南品あやつり	1791	334	下段 11 行
御きげんよふいらつしやり	まし		女房	南品あやつり	1791	335	下段 15 行
サアいらつしやり	まし		茶屋男藤七	南品あやつり	1791	335	下段 17 行
一ツせん下さり	まし		こじき	南品あやつり	1791	336	上段 5 行
サアいらつしやり	まし		若ひ者四助	南品あやつり	1791	336	下段 15 行
サア一ツお上りなさり	まし		若ひ者四助	南品あやつり	1791	337	上段 7 行
サア塔さんおいでなさい	まし		若ひ者四助	南品あやつり	1791	338	上段 14 行
こつちへおはいんなさり	まし		お増	南品あやつり	1791	338	下段 4 行
おまんまをおあんない	まし		子供	南品あやつり	1791	338	下段 8 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
塔さんお上りなひ	まし		お増	南品あやつり	1791	339	上段 1 行
お咄しなさる	まし	な	お増	南品あやつり	1791	339	上段 17 行

【洒落本大成第十六巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
お一ツおあかなさい	まし		八重	仕懸文庫		23	下段 14 行
サアおあがなせへ	まし	な	女ひで	仕懸文庫		28	上段 14 行
御文をお出しなされ	まし		茶屋女	錦之裏	1791	65	上段 4 行
もちつとおとなさり	まし		源七	錦之裏	1791	65	下段 5 行
お茶を一ツくださり	まし	トちやをくみ	牛吉	錦之裏	1791	68	上段 17 行
ちつとおつきなすつて下さり	まし	トくはんけ帳をみせる	中郎	錦之裏	1791	69	上段 13 行
一トすじばかりおつきなさり	まし		中郎	錦之裏	1791	69	上段 14 行
おはややお出なされ	まし	トいひすて行	茶屋ノ男	錦之裏	1791	70	上段 13 行
おかしなすつてくださり	まし		やりて	錦之裏	1791	71	下段 1 行
御機げんよふお出なさい	まし		タハコ	西遊記	1791	82	下段 6 行
サアおあがりなさい	まし		理兵衛	西遊記	1791	84	下段 13 行
こちらへいらつしやり	まし	トにかへつれゆき	若イ者	西遊記	1791	84	下段 15 行
モシひとつめしあがり	まし		若イ者	西遊記	1791	85	上段 4 行
おとりなされ	まし		理兵衛	西遊記	1791	85	上段 7 行
となたもいらつしやい	まし		芸者豊吉、今吉	西遊記	1791	85	下段 12 行
まつおあかりなさい	まし	ト云すてて	豊吉	西遊記	1791	85	下段 17 行
おきせるをかしなされ	まし		芸者	西遊記	1791	86	上段 5 行
なんぞをうたひなせへ	まし		芸者	西遊記	1791	86	上段 9 行
ちつとごぜんをあがり	まし		理兵衛	西遊記	1791	86	上段 15 行
おきかせなさい	まし	な	豊吉	西遊記	1791	87	上段 1 行
お出なされて下さり	まし		舟頭	名所拜見	1796	340	上段 2 行
サアお出なされ	まし	ト二人竹地へ	舟頭	名所拜見	1796	340	上段 4 行

【洒落本大成第十七巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
あしき御事は。御ひからせ下され	まし	。	女郎	戯言浮世瓢単	1797	24	上段 8 行
御ざらば御きかせなされ	まし		珍菴	うかれ草紙	1797	57	上段 4 行
御二階へいらつしやり	まし		女房、娘下女	郭通遊子	1797	73	下段 2 行
スナナラおはやういらつしやり	まし		女房、娘下女	郭通遊子	1797	74	下段 3 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
まづこれへいらつしやり	まし		喜兵へ	郭通遊子	1797	75	上段 11 行
あちらへいらつしやり	まし		女房、娘下女	郭通遊子	1797	76	上段 10 行
面白ひことでもお聞せなはい	まし	ト障子を	お八重	辰巳婦言		134	下段 13 行
うつちやつて置なはい	まし	ヨト	お角	辰巳婦言		139	上段 17 行
チトあちらへいらつしやい	まし		若者当次	津国毛及	1798	208	上段 12 行
部屋へ入らつしやい	まし		お波	津国毛及	1798	209	下段 14 行
おはやく御出なさり	まし		会所の男	廓節要	1798	225	下段 16 行
小部屋へ御出なさり	まし		白岡幸治	廓節要	1798	226	上段 2 行
見られねへやうになさり	まし		白岡幸治	廓節要	1798	229	上段 7 行
ちといらつしやい	まし	ヤ	たいこもち浮世伊之介	客物語	1799	262	下段 7 行
ごかんになすつて下さい	まし		やりて	客物語	1799	267	下段 16 行
こちらへ入らつしやい	まし	ト	げいしや大ぜい	客物語	1799	268	下段 11 行
のつておくんなさい	まし		かご	品川楊枝	1799	290	下段 1 行
お茶を御あがりなされ	まし		子供	品川楊枝	1799	292	上段 8 行
チトあちらへ入つしやい	まし		若者	品川楊枝	1799	293	下段 1 行
チトおやすみなされ	まし		若者	品川楊枝	1799	294	下段 15 行
ちつとおはいりなされ	まし		文朝	品川楊枝	1799	296	上段 3 行
おしつかにおつしやり	まし		若者	品川楊枝	1799	299	上段 12 行
私におあづけなされて下さい	まし		若者	品川楊枝	1799	299	下段 6 行
おやすみあそばし	まし		若者	品川楊枝	1799	299	下段 8 行
サア御出なはい	まし	ト	女	仲街艶談	1799	335	上段 10 行
ハイおやすみなはい	まし	ト立てゆく	女郎	仲街艶談	1799	341	上段 9 行
ヲやおいてなさいへ	まし		むすこ女房娘	猫射羅子	1799	353	下段 2 行
おやすみなさり	まし	トしらねへ人のとなりへ	娘	猫射羅子	1799	354	上段 3 行
よくかんけへて見なせへ	まし	。	おかめ	猫射羅子	1799	354	下段 12 行

【洒落本大成第十八巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
さよふならおやすみなされ	まし		茶や	契情買言告鳥	1800	125	上段 1 行
おやんなさり	まし		茶や	契情買言告鳥	1800	125	上段 5 行
見てくんなはい	まし		女房	大通契語	1800	147	上段 8 行
お鶴さん鳥渡お出なさい	まし	トいふこそよきしを	禿	大通契語	1800	151	下段 7 行
サア召	まし		かご	大通契語	1800	153	上段 6 行
年明の約速をなさひ	まし	と伏たる	花せん	通俗子	1800	167	上段 6 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
ちとうきうきとなされ	まし		うば	白狐通	1800	216	上段 5 行
一日二日お待なされ	まし	といふから	隠居	白狐通	1800	222	上段 14 行
一ツぶくおあがんなさい	まし	といふ所へ	たつ	松登妓話	1800	235	上段 16 行
火鉢のそばへお出なせへ	まし		幸次郎	松登妓話	1800	238	上段 10 行
あちらへいらつしやり	まし		与二郎兵へ	松登妓話	1800	238	下段 16 行
口でおつしやり	まし		まさ	松登妓話	1800	243	下段 1 行
きつでも付けてころうじ	まし		まさ	松登妓話	1800	243	下段 3 行
上へおあがんなさい	まし	ト	言次郎	虚実情の夜桜	1800	290	上段 14 行
壺枚イ下さり	まし		北庵	南門鼠	1800	319	上段 2 行
気を付けてごらふじ	まし		西助	南門鼠	1800	320	下段 10 行
御返事をなさり	まし	とつばなして	西助	南門鼠	1800	327	下段 9 行
御仕度をなさり	まし		西助	南門鼠	1800	328	下段 4 行
お立ちなさい	まし	な	西助	南門鼠	1800	328	下段 6 行

【洒落本大成第十九卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
お一ツお上りなはい	まし	トたし物いろいろてる	女久	風俗通	1800	29	下段 8 行
是て御ふしやうなはい	まし	と二人かまえにすへる	娘分	風俗通	1800	29	下段 12 行
内におすいなさい	まし		船頭	風俗通	1800	29	下段 13 行
くすぐつてへからおよしなはい	まし	ヨ	子どものへ	風俗通	1800	31	上段 12 行
おいでなさり	まし		女房	三人酩酊	1799	53	下段 4 行
こちらへ御上りなされ	まし		女房	三人酩酊	1799	53	下段 4 行
御出なさり	まし	ト花色さなだのうら	女房	三人酩酊	1799	53	下段 10 行
御見立なされ	まし		若者	三人酩酊	1799	54	上段 5 行
チトおすひなされ	まし		若者	三人酩酊	1799	54	上段 10 行
きかへておいでなさい	まし		若者	三人酩酊	1799	54	上段 17 行
おやすみなされ	まし		若者	三人酩酊	1799	55	上段 1 行
おへやおいてなされ	まし	とむりにつれて行く	若者	三人酩酊	1799	56	下段 3 行
とひてねなはい	まし	もことばかはれど	浮花川客	部屋三味線		77	下段 11 行
ちつとおまちなはい	まし		女房	遊徳窟烟之花	1802	104	上段 13 行
どなたかおかけなはい	まし		女房	遊徳窟烟之花	1802	104	下段 16 行
おかへりにおよんなはい	まし		女房	遊徳窟烟之花	1802	105	上段 16 行
おまへさんもいらつしやい	まし	な	女房	遊徳窟烟之花	1802	106	上段 1 行
サア入らつしやい	まし	トてうちんをつけさきにたち	女房	遊徳窟烟之花	1802	106	上段 9 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
やつぱり大見世になさり	まし		茶や	遊僊窟烟之花	1802	108	下段 4 行
おもてから御あがりなされ	まし		茶や	遊僊窟烟之花	1802	108	下段 7 行
おまんまをあかんない	まし		かぶろ春野	遊僊窟烟之花	1802	109	下段 12 行
かつておくんない	まし	よ	かぶろぬき葉	遊僊窟烟之花	1802	110	上段 17 行
かつておくんない	まし	よ	かぶろ留は	遊僊窟烟之花	1802	110	下段 1 行
うきうきとして下さり	まし		妻お時	三篇二筋道宵之程	1800	127	上段 5 行
サアきせかへ	まし	よ	妻お時	三篇二筋道宵之程	1800	128	上段 17 行
あんどさせて下さり	まし		妻お時	三篇二筋道宵之程	1800	129	上段 17 行
あちらへおいてなされ	まし	とその中に	若者	三篇二筋道宵之程	1800	131	上段 9 行
全快させて下さり	まし	と言たら	母	三篇二筋道宵之程	1800	143	下段 17 行
叶へて下さり	まし		妻お時	三篇二筋道宵之程	1800	147	上段 2 行
ヲヤ丈助さんお出なさい	まし	きつひ御見かざりね	女房	意妓口		177	上段 2 行
それから又お出なさい	まし		女房	意妓口		179	上段 9 行
どなたもお出なさい	まし	ト	女房	意妓口		179	下段 2 行
サア御出なさい	まし	ト	女房	意妓口		179	下段 11 行
どなたもよぶ御出なさい	まし		娘分	意妓口		180	上段 16 行
中六畳へおいでなさい	まし		娘分	意妓口		190	下段 14 行
八さんお出なさい	まし		小僧	客衆一華表		200	下段 10 行
どうともしない	まし		娘分	客衆一華表		201	上段 10 行
一ツおあかんない	まし		女おくま	客衆一華表		202	下段 6 行
やつておくんない	まし		女房	客衆一華表		204	上段 1 行
ちつとおやすみなさい	まし		女房	客衆一華表		204	下段 1 行
勝手にしなさい	まし		おつま	客衆一華表		205	上段 2 行
お出なさい	まし	な	起番の女	玉之帳		219	下段 7 行
お出なさい	まし	な	起番の女	玉之帳		220	下段 3 行
おまんまをおあんない	まし		起番の女	玉之帳		221	下段 4 行
一ツおあんない	まし	。	起番の女	玉之帳		221	下段 6 行
お一ツおあんない	まし	。	起番の女	玉之帳		226	上段 13 行
ちつとおすいなさい	まし	。	起番の女	玉之帳		227	上段 8 行
お出なさい	まし	トいふをきつけに	起番の女	玉之帳		227	上段 11 行
お玉さんお出なさい	まし	よトいふゆえ	起番の女	玉之帳		227	下段 3 行
ニかいへお出なさい	まし		女房	玉之帳		232	上段 6 行
サアおあかんせへ	まし		女房この	孔雀そめき		241	下段 3 行
今日お出なさい	まし	と申されました	清六	孔雀そめき		243	下段 4 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
いらしやり	まし		千	孔雀そめき		245	上段 11 行
二組斗に成れ	まし		いち	孔雀そめき		245	下段 1 行
あちらへお出なされ	まし		まはしかた	廓写絵		258	下段 2 行
やねになせへ	まし	わきはりも	筆者	五臓眼		297	上段 5 行
よくつもつてごらうし	まし		治	青楼惚多手買		347	上段 4 行
サアチツ居らツしやい	まし	と若者めかう	金十	面美知之煙		361	上段 17 行
もそつとお召被成	まし		商人	面美知之煙		361	下段 13 行
ハイ御見立被成り	まし		若者	面美知之煙		362	上段 14 行
ハイお吉●お立なさい	まし		若者	面美知之煙		362	下段 1 行
おらくさんお立なさい	まし		若者	面美知之煙		362	下段 4 行
となたも行ておいて成り	まし		若者	面美知之煙		362	下段 10 行
おみたてかへになすつてくだされ	まし		若者	面美知之煙		365	上段 11 行
お気毒なからおくれなさい	まし		若者	面美知之煙		365	上段 16 行
サアサアおあかり被成	まし		五助	面美知之煙		370	下段 1 行

【洒落本大成第二十巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
マアおいらんおあんなせへ	まし		女房	廓之桜	1801	116	上段 9 行
マアおあがりなされ	まし		女房	廓之桜	1801	116	下段 4 行
マアマアおしづかになされ	まし		茶や夫婦	廓之桜	1801	117	下段 2 行
はつきりと気をおもちなされ	まし		女房	廓之桜	1801	118	上段 4 行
はつきりと気をお付なさい	まし		女房	廓之桜	1801	118	下段 10 行
チトお目をおさましなされ	まし		伝蔵	匂ひ袋	1801	178	下段 5 行
おききなすつて下さり	まし	ト咄しの折から	三次	匂ひ袋	1801	181	上段 6 行
うつくしくおんななさい	まし		伝蔵	匂ひ袋	1801	181	下段 16 行
それまでおより	まし		伝蔵	匂ひ袋	1801	182	下段 1 行
まアごゆるりと、なされ	まし		茶や女	比翼紫	1801	194	上段 13 行
ちとおすひなされ	まし	トいふところへ	五郎	比翼紫	1801	195	上段 12 行
権さん御用心をなさい	まし		五郎	比翼紫	1801	195	下段 3 行
さあおあがんなはい	まし		女中	ニ蒲団	1801	214	上段 7 行
さあおあがんなはい	まし	トいふども	女中	ニ蒲団	1801	214	上段 9 行
すこしこれにおひかへなされ	まし	といふは	若イ者	ニ蒲団	1801	214	下段 13 行
こちらへいらつしやり	まし	といふのは	若イ者	ニ蒲団	1801	217	上段 8 行
これへいらつしやり	まし		若イ者	ニ蒲団	1801	217	上段 9 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
おやすみなはい	まし		女中	二蒲団	1801	218	上段 11 行
おいでなはい	まし		茶やの女	二蒲団	1801	218	上段 15 行
御りやうけんさい	まし		水吉	二蒲団	1801	222	上段 12 行
おゆるしなされ	まし	よト人をかきわけ	お竜	(にんべんに舞) 意紗	1801	240	上段 17 行
むまいものを下さり	まし	といつてくりや	客気楽	夢之盗汗	1801	258	上段 10 行
ききなはんせい	まし	な	小さい	備語手多美	1801	299	下段 8 行
まづまちなはんせい	まし		小春	備語手多美	1801	303	上段 17 行
ふみをお出しなされ	まし		茶やの女	古物尋日扇香記	1801	314	上段 8 行
内にをかきなさい	まし	トゆく	茶やの女	古物尋日扇香記	1801	314	上段 13 行
此かれいをとんなさい	まし		さかなや	古物尋日扇香記	1801	315	上段 8 行
お茶を一つくだり	まし	ト茶をくみ	午介	古物尋日扇香記	1801	318	下段 5 行
おつきなさつて下さり	まし	ト帳を出す	中郎	古物尋日扇香記	1801	319	上段 13 行
おつきなさり	まし		中郎	古物尋日扇香記	1801	319	上段 14 行
おはやうを出なされ	まし	トいいすてゆく	茶や男	古物尋日扇香記	1801	321	上段 7 行
おかしなすてくだり	まし		やりて	古物尋日扇香記	1801	321	下段 14 行
一つおあがんさり	まし		茶や女房	古物尋日扇香記	1801	322	下段 8 行
初名代になされ	まし	といひやすしか	藤重	雨夜嘶	1801	338	上段 16 行
お出あそはして下さり	まし		藤重	雨夜嘶	1801	339	上段 10 行
ゆるしておくんなさひ	まし		おこう	雨夜嘶	1801	341	上段 11 行
ちつとお上りなさり	まし		女房	三千之紙屑	1801	348	下段 8 行
おくんさい	まし	と	いく、せの	三千之紙屑	1801	358	下段 3 行
折ふしおいでなさり	まし	な	たいこ持拳吉	後編姫意妃	1802	380	上段 15 行

【洒落本大成第二十一巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
またわらやアがるかいめへ	まし	ひ	放蕩家鉄	穴可至子	1802	39	上段 16 行
どうぞお揚なすつて下さり	まし	といふたらう	十次郎	にほひ袋	1802	157	上段 11 行
サアこちらへお出なさり	まし	ト少しかたよる	二人(十次郎、百我)	にほひ袋	1802	159	上段 2 行
どなたもそうなすつてお出なさり	まし		五郎兵衛	にほひ袋	1802	159	上段 3 行
こちらへお出なさり	まし	な	百我	にほひ袋	1802	159	上段 4 行
さやうならあなたはに御出なさり	まし	トいいながら出て行く	二人(十次郎、百我)	にほひ袋	1802	159	下段 1 行
はみそんなら御めんなさり	まし		五郎兵衛	にほひ袋	1802	159	下段 2 行
そんならお早くなさり	まし		弥介	五大力	1802	174	上段 12 行
どなたもおまんまをあかり	まし		女	五大力	1802	177	下段 17 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
三さん能見てみておくんない	まし		音吉	五大力	1802	178	上段 17 行
サアあがり	まし		大夫五助	五大力	1802	178	下段 6 行
千さん覚エてみなはい	まし		音吉	五大力	1802	179	上段 13 行
モウちつとお休みなさい	まし	。	船宿千蔵	五大力	1802	180	上段 16 行
おひんなつて御らうじ	まし	。	船頭	五大力	1802	181	下段 4 行
ちよつとお出ない	まし	ト云捨てゆく	平字	三昧誌	1802	245	上段 16 行
一寸御出ない	まし	エ	平字	三昧誌	1802	245	上段 17 行
ハイお休ない	まし	ト云捨ていつれへか行	枝折	三昧誌	1802	251	上段 6 行
ちつとおやすみなせへ	まし	。	藪井正徳	青楼娼言解	1802	298	下段 9 行
ちよつとおよんなせへ	まし	トやり手部やへいれる	お岩	青楼娼言解	1802	305	下段 11 行
マアしたにお出なせへ	まし	。	お岩	青楼娼言解	1802	305	下段 12 行
いらしつておあがりなさい	まし		女房	青楼日記	1802	343	下段 10 行
サアげしなり	まし	といはぬばかりの取あつけへ に	酒好	青楼日記	1802	348	上段 17 行
きておくんない	まし	よ	小春	八幡鐘	1802	382	下段 15 行
火にてもくべて下さり	まし		紙治	八幡鐘	1802	383	下段 7 行
さあ見なさい	まし	といたこのほんを	おやま	八幡鐘	1802	386	上段 1 行

【洒落本大成第二十二巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
どうする物か小糸さんも覚エてみない	まし	トたいたたりつめつたりする	おきよ	南門鼠婦	1802	54	上段 7 行
佐七さん扇子を借ない	まし	。	おきよ	南門鼠婦	1802	54	上段 9 行
うそをつきない	まし		おきよ	南門鼠婦	1802	54	上段 12 行
黒主を引いてお聞せない	まし	な	おきよ	南門鼠婦	1802	54	上段 14 行
サアひきない	まし		おきよ	南門鼠婦	1802	54	上段 15 行
モット何ぞひみて聞せない	まし	な	おきよ	南門鼠婦	1802	54	下段 7 行
マア寐ない	まし	な	小糸	南門鼠婦	1802	55	上段 1 行
何をするか付いて居て見ない	まし	ト少しまけ口上を	小糸	南門鼠婦	1802	55	上段 10 行
ちつとうるさからうが堪忍しない	まし	トいひながらそばへよる	小糸	南門鼠婦	1802	55	上段 16 行
サアこつちをむきない	まし	なトいいながら	小糸	南門鼠婦	1802	55	下段 1 行
これさもつとこつちへ寄ない	まし	なト言ながら	小糸	南門鼠婦	1802	55	下段 2 行
じつとしてみない	まし	ト云ながら	小糸	南門鼠婦	1802	55	下段 4 行
是も苦界だと思つてみない	まし		小糸	南門鼠婦	1802	55	下段 6 行
夜着をちつと懸ない	まし		小糸	南門鼠婦	1802	55	下段 7 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
うつちやらかして置ない	まし	な	小糸	南門鼠婦	1802	56	上段 3 行
ひよつとそいふように成て見ない	まし	。	小糸	南門鼠婦	1802	56	下段 7 行
もしせかれて見ない	まし	。	小糸	南門鼠婦	1802	57	上段 2 行
都合のいいやうにして置きない	まし	な	小糸	南門鼠婦	1802	57	下段 14 行
そんならマアそれ迄御寐なり	まし		茶屋	南門鼠婦	1802	58	上段 15 行
いらつしやり	まし		若イ者	南門鼠婦	1802	58	下段 8 行
どふぞお出なすつてくださり	まし	ト咄して	茶屋	南門鼠婦	1802	59	上段 2 行
ハイ御茶をおあんない	まし		小供	南門鼠婦	1802	59	上段 2 行
イエマアおあんない	まし	な	まかないお力出 しもの	南門鼠婦	1802	60	上段 8 行
マアどなたもお這んなさい	まし	トいふを	若者	南門鼠婦	1802	60	上段 13 行
マアにくひ口だ覚へてあない	まし		お妻	南門鼠婦	1802	61	上段 6 行
マア是はおあんない	まし		お艶	南門鼠婦	1802	61	上段 14 行
いやだよあれきよいない	まし		新造	南門鼠婦	1802	61	下段 6 行
あちらへいらつしやり	まし	。	茶屋	南門鼠婦	1802	62	上段 16 行
サアお出なさり	まし	トみなみな一度にたつて	茶屋	南門鼠婦	1802	62	下段 2 行
モシお着かへない	まし		新造	南門鼠婦	1802	62	下段 12 行
サアお出なさり出ない	まし	ト云ながら	新造	南門鼠婦	1802	62	下段 14 行
一つぶくおあんない	まし	な	お妻	南門鼠婦	1802	62	下段 15 行
そんならお休ない	まし	トいいし迄にて	お妻	南門鼠婦	1802	63	上段 1 行
そんならお休ない	まし	ト云捨て	新造	南門鼠婦	1802	63	上段 4 行
寐ない	まし	あをいであげエしよう	小糸	南門鼠婦	1802	63	上段 7 行
おまいはんもねない	まし	な	小糸	南門鼠婦	1802	63	上段 10 行
待つて居ておくんない	まし	ト云捨て	小糸	南門鼠婦	1802	63	下段 11 行
御帰りなさつてくださり	まし	ト云ことは	若者	南門鼠婦	1802	64	上段 5 行
ちよつといらつしやい	まし		やまけ	挑燈藏	1802	71	2 行
マアお上りなせへ	まし		亭主	挑燈藏	1802	76	上段 5 行
わたくしにおまかせなせへ	まし		寺岡や平エ門	挑燈藏	1802	85	下段 4 行
だんな一つかつておやんなさへ	まし		かうのや直右エ 門	仇手本	1801	96	下段 15 行
そふしなはい	まし	とつれだち見とおしへゆく	女中	仇手本	1801	102	下段 10 行
おやすみなさり	まし	トおくの方へ行	男	通神藏	1801	124	上段 10 行
ちとおやすみなさり	まし		女房おいし	通神藏	1801	129	下段 10 行
旦那さんお茶をおあがなせへ	まし		お十	通神藏	1801	131	上段 5 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
まつおしつまりなされ	まし		頭取	花折紙	1802	165	下段 3 行
これおきておいてなさい	まし		おてい	梅になく鳥	1802	214	下段 16 行
すこしおもちなさつて下さみ	まし	といつてもうもくの下駄を	おてい	梅になく鳥	1802	215	下段 10 行
あしたははやく帰んなさい	まし		おてい	梅になく鳥	1802	215	下段 11 行
いそぐませうから三百下タさり	まし		カゴ	梅になく鳥	1802	216	上段 13 行
そんな事をおつしやらすと忝きんツ、下さり	まし		カゴ	梅になく鳥	1802	216	下段 5 行
さあお上りなさい	まし		若もの喜介	梅になく鳥	1802	218	上段 9 行
まつここへいらつしやい	まし	とまつあき部屋へおく	若もの喜介	梅になく鳥	1802	218	上段 12 行
おひとつめしあかり	まし		若もの喜介	梅になく鳥	1802	218	上段 15 行
サアおあげなさり	まし		若もの喜介	梅になく鳥	1802	218	下段 17 行
おめしかへなさい	まし		若もの喜介	梅になく鳥	1802	219	上段 2 行
新さん。お見立なせへ	まし		茶屋よし本女房	夜の錦		227	上段 8 行
左様ならいらつしやり	まし		女房	甲駅雪折笹	1803	246	上段 16 行
これはいらつしやり	まし		若者	甲駅雪折笹	1803	247	上段 4 行
マアいらつしやり	まし	トつれゆく	若者	甲駅雪折笹	1803	247	上段 6 行
おめへこそふられたおききなさり	まし		三次	甲駅雪折笹	1803	248	下段 9 行
伊太さんいらつしやい	まし		しま	酒徒雅	1803	294	下段 3 行
伊太さんおひとつおあんなさい	まし		しま	酒徒雅	1803	294	下段 5 行
旦那いらつしやい	まし	ト出行	伊太八	酒徒雅	1803	294	下段 7 行
おまへはんおひとつおあんなはい	まし		けい者おほん	酒徒雅	1803	295	上段 5 行
おさみししとおやすみなさり	まし	お迎は	茶や女房	酒徒雅	1803	295	下段 7 行
さア音さん御始なせへ	まし		お政	三人酩酊	1803	319	下段 5 行
とふそ私におくんなはい	まし		お富	三人酩酊	1803	320	下段 2 行
書せておくれなせへ	まし		お磯	三人酩酊	1803	320	下段 6 行
またおひんなつてのことになせへ	まし		娘分てう	佳妓窺		333	上段 17 行

【洒落本大成第二十三巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
おゆるしなされて。くんなされ	まし	ヨ	権助	契情実之巻	1804	45	上段 6 行
あしたお文を早くなされ	まし	よ。	権助	契情実之巻	1804	47	上段 7 行
源兵衛様まつ御取遊し	まし	ト玉子焼あわひふくら	平千吉	蝶の世界	1804	89	上段 15 行
そなた二入せられ	まし		用人	蝶の世界	1804	90	下段 9 行
もふ御入下され	まし		入番新吉	蝶の世界	1804	91	上段 7 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
せび御入被下	まし		入番新吉	蝶の世界	1804	91	上段 8 行
先ツなさつてころふし	まし		ひら当蔵	蝶の世界	1804	91	下段 16 行
あのせんこり御ろうし	まし	此寒いによくいたします	主膳	蝶の世界	1804	94	上段 15 行
奥の中二階へ御出なさい	まし	ト先へたつてゆく	茶や女	蝶の世界	1804	94	下段 6 行
そりやア上下とめしかへ	まし		多宮	蝶の世界	1804	95	上段 16 行
サアお見たてあそばし	まし	ト若者を先ニ立て行かけみせの	女房	蝶の世界	1804	95	下段 2 行
芸者衆をおよばなさい	まし	御初会ではどふも	女房	蝶の世界	1804	95	下段 16 行
サアあつちらへいらつしやう	まし		女房	蝶の世界	1804	96	上段 12 行
もふちとおやすみおそはし	まし		多宮、主膳	蝶の世界	1804	96	下段 9 行
おはやくおかへりなさり	まし		中ばたらき	傾城買花角力	1804	119	下段 6 行
私一盃呑てお預り申	まし	よ	さの	蓬駅妓談	1805	173	下段 16 行
ほんの事かアうらにくんさい	まし		関東道者	野圃の玉子	1805	190	上段 17 行
サすんなら御やすみなされ	まし	よト出てゆく	かか	駅客姐せん	1805	226	上段 16 行
おいでなされて下さり	まし	よ	亭主	浮雀遊戯嶋		310	下段 1 行
おとまりなされてくださり	まし	よ	亭主	浮雀遊戯嶋		310	下段 4 行
サアおやすみなさい	まし		茶や娘	面和俱喃	1806	333	下段 9 行
ちとおはやくいらつしやり	まし		茶や娘	面和俱喃	1806	334	上段 1 行
おめへさんは足袋をとんない	まし	な	茶や娘	面和俱喃	1806	334	上段 10 行
そこのあとのほうにおきない	まし	な	花町	面和俱喃	1806	334	上段 13 行
これをときない	まし	なト客のおびを	花町	面和俱喃	1806	335	上段 5 行
づきんとんない	まし		客八五郎	面和俱喃	1806	335	上段 11 行
ちよつと見せない	まし		菊里	面和俱喃	1806	336	上段 13 行
サア今のものを見せない	まし		菊里	面和俱喃	1806	336	上段 15 行
そんならよしな	まし	トすねてあをむき	客八五郎	面和俱喃	1806	336	上段 16 行
その文を届てやんない	まし		菊里	面和俱喃	1806	336	下段 17 行
初のつもりできない	まし	そふしねへと	菊里	面和俱喃	1806	337	上段 16 行
ちつとおすいなされ	まし		女郎	青楼草紙	1806	344	下段 8 行
サアサアめし	まし		かこ	青楼草紙	1806	348	下段 11 行

【洒落本大成第二十四巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
お茶ア。お上りなアい	まし		子供	退屈晒落	1806	77	上段 6 行
そんなら市さん。おはじめなさい	まし	。	茶や	退屈晒落	1806	77	下段 3 行
はなして下さい	まし	。	重	退屈晒落	1806	78	下段 8 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
いいかげんに。しなあい	まし	ト引たをされる。	芳里大明神	退屈晒落	1806	78	下段 9 行
火があり升烟草を上り	まし		重	退屈晒落	1806	78	下段 14 行
ソレそこを見なあい	まし	ふとつて。おりましやうが	按摩	退屈晒落	1806	78	下段 15 行
おいでなさい	まし		(例)	船頭深話	1806	87	上段 12 行
こつちへお出なはい	まし	トさきに立てゆく	女	船頭深話	1806	98	下段 10 行
こつちらへおいでなひ	まし		松蔵	船頭深話	1806	99	下段 1 行
おきかせなはい	まし	ト吉か顔をじろりと見る	歌	通言東至船		139	上段 11 行
吉さんちつとおやすみなはい	まし		歌	通言東至船		141	下段 7 行
わたくしにおあづけなすつて下さい	まし	此御子もまたあんまりだよ	女	通言東至船		144	上段 2 行
豊さん御りやうけんなすつて下さい	まし		女	通言東至船		144	上段 4 行
マア御しづかにおやすみなはい	まし		女	通言東至船		144	上段 9 行
まづおまちなさい	まし		周吉	通客一盃記言	1807	180	下段 13 行
まづ御聞なさい	まし	あなたがおかへりなさろうと	周吉	通客一盃記言	1807	181	上段 14 行
あなたまづお静におつしやり	まし		その	通客一盃記言	1807	182	上段 10 行
先ツお静におつしやい	まし	あなたのやうに	周吉	通客一盃記言	1807	182	下段 13 行
あちらへおいでなさい	まし	客人もかへりましたから	周吉	通客一盃記言	1807	184	上段 2 行
お心能お一ツめしあがり	まし		周吉	通客一盃記言	1807	184	上段 3 行
ドレお見せなはい	まし		おうた	船頭部屋	1807	343	上段 2 行
アレサお見せなはい	まし		おうた	船頭部屋	1807	343	上段 3 行

【洒落本大成第二十五巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
おしづまりなされ	まし	これはさだめしわけ	亭主	北系兵庫結	1808	23	下段 17 行
なんでもおまかせなさり	まし		亭主	北系兵庫結	1808	24	上段 2 行
御しつまり	まし		亭主	北系兵庫結	1808	24	上段 11 行
きく川さんまつ御出なされ	まし		女	北系兵庫結	1808	24	下段 4 行
御まちなされくたさり	まし		亭主	北系兵庫結	1808	25	上段 2 行
はやうこれへ御出なされ	まし		亭主	北系兵庫結	1808	25	上段 4 行
サアサア早ふ御出なされ	まし		若者	北系兵庫結	1808	26	上段 8 行
おいてなきつてのことになさり	まし	さアさア	若者	北系兵庫結	1808	26	上段 11 行
はやく御つれなされ	まし		亭主	北系兵庫結	1808	28	上段 9 行
御ゆるしくたされ	まし		助市	北系兵庫結	1808	29	下段 3 行
ちよつとお出なきつて下さり	まし		和尚	家満安業志	1808	38	上段 15 行
よこしておくんはい	まし		さき	後編甲斐新語・三篇甲斐新語	1808	60	上段 14 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
おしづかになさい	まし		時兵衛	後編甲斐新語・三篇甲斐新語	1808	61	下段15行
一寸御出ない	まし	といやにしかける	お熊	昼夜夢中鏡	1812	92	上段8行
火の用心さつしやい	まし	とナカクかなぼふを	梅かへ	昼夜夢中鏡	1812	92	下段7行
今ちぶんなんざい	まし		おいらん初糸	昼夜夢中鏡	1812	93	下段9行
見つからぬ様になさい	まし		やりて	阿倍川の流	1813	144	上段8行
和歌屋までお出なさい	まし	と	やりて	阿倍川の流	1813	149	上段11行
一べん往ておくんなさい	まし		馬鹿	阿倍川の流	1813	153	下段13行
そつと渡して下さい	まし		馬鹿	阿倍川の流	1813	153	下段16行
マアお出なさい	まし	な	雲閣	通俗雲談	1813	169	下段17行
ちつとおしづかになされ	まし	と	若者伊兵衛	通俗雲談	1813	171	上段17行
おいらんお休なさり	まし		馬合	通俗雲談	1813	171	下段9行
ちよつとこつちをむきない	まし		女郎	四季の花	1814	210	下段2行
サアおあがんなさい	まし	トひつばる	女郎屋のわかひ者	四季の花	1814	219	上段6行
ようムり升からおあがんなさい	まし	。	女房	四季の花	1814	221	上段6行
ずいぶんさやうなさい	まし	それでも老丁目へ	女房	四季の花	1814	221	上段15行
もしへなんぞおだしなはい	まし	久しく大じんまひを	げいしや	四季の花	1814	223	上段14行
下でごろうじてください	まし	。	若者	四季の花	1814	238	下段11行
お下物はお置なさり	まし		ていしゆ	くるわの茶番	1815	262	下段10行
叶ふやうになされて下さり	まし	となく	佐香穂	ふたもと松三篇	1816	305	上段10行
ふとになつて下され	まし		太左エ門	ふたもと松三篇	1816	308	下段7行
しるふとにしてください	まし		太左エ門	ふたもと松三篇	1816	315	下段4行

【洒落本大成第二十六巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
サアおあがりなさい	まし		お町	傾城買禿筆		21	下段13行
マアお待なさい	まし	これおけへりなさると	母	傾城買禿筆		23	上段7行
こころのうちさつておくんなさい	まし	ヲヤそんなにびつくり	女	傾城買禿筆		28	上段7行
もちつとこちらへおよんなさい	まし		女	傾城買禿筆		28	上段8行
まだぬるう御座りますから少しおまち遊し	まし		湯や女房	夢の繪拍子	1818	188	下段13行
是はいらつしやい	まし	サア御客だよ	見せ番の女	いろは雛形		210	上段4行
喜兵衛さんお休なさいはい	まし	トみなみな下へ行	げいしや	婦身嘘	1820	222	下段11行
いつてお出なさい	まし		二三人	婦身嘘	1820	223	下段16行
サア六さんもしおひんなり	まし	。	おすで	婦身嘘	1820	228	上段3行
どつちでも御あがんなさい	まし		おすで	婦身嘘	1820	228	上段7行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
サアおはじめなさい	まし		おすで	婦身嘘	1820	228	上段14行
モシちよつといつておいでなさい	まし	な	おすで	婦身嘘	1820	229	上段15行
サアーツおあがんなさい	まし		おすで	婦身嘘	1820	230	上段8行
おやすみなさい	まし	トみなみな下へゆく	大吉、兼次	婦身嘘	1820	230	上段15行
おききなすつてください	まし		おむと	婦身嘘	1820	230	下段4行
マア気をおしづめなされ	まし		松どん	婦身嘘	1820	231	上段11行
是はいらつしやい権さんよういらつしやい	まし	ト先にたちはしごを	喜助	遊子娛言	1820	276	上段12行
まづカウいらつしやい	まし	チ	宗吉	遊子娛言	1820	277	下段12行

【洒落本大成第二十七巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
だんなよんできかせておくんなせへ	まし	といつたらだんなが	せんどう金	東海探語	1821	14	下段1行
直さんおききなさい	まし	こふであります	政吉	東海探語	1821	15	下段17行
よふございませうあちらになさめ	まし		おせん	東海探語	1821	16	上段14行
もし旦那ちよつと頭巾をおとんなせへ	まし		伝	東海探語	1821	26	下段3行
うつちやつて置なせへ	まし		伝	東海探語	1821	26	下段5行
旦那もしなんにもいわずにおききなせへ	まし		伝	東海探語	1821	26	下段13行
おくんなさい	まし	とはいつたが。	おさん	斯農鄙古間	1821	33	上段1行
さやうならお休みなさり	まし	ト双方このさほぎに	若者	青楼胸の吹矢		57	上段13行
さやうなら。入らつしやい	まし	トしんちうの手あぶりを	主の玉ぞう	花街鑑		71	下段11行
お聞なされ	まし	。	ばば	花街鑑		73	下段5行
おやすみなされ	まし		ばば	花街鑑		73	下段12行
それにつき	まし		正六	青楼快談玉野語言	1822	105	下段11行
又さま事ぜひぜひおんつれ	まし	。	与六	青楼女庭訓	1823	154	下段1行
つかはされ	まし		与六	青楼女庭訓	1823	156	上段3行
どふぞお上ケなすつて。下さり	まし	トふところからそつと出して	お苦	青楼女庭訓	1823	162	下段11行
二階へ持来たりサアおあがりなされ	まし	。	お苦	青楼女庭訓	1823	163	下段4行
たんとお替なされ	まし		お苦	青楼女庭訓	1823	163	下段12行
おとふりなされ	まし		三介	花街寿々女		282	下段12行
此方へお這入なされ	まし	トざしきの方を	仏念	花街寿々女		283	上段3行

【洒落本大成第二十八巻】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
一ツめし上り	まし	。	女房	青楼色唐紙	1828	73	上段14行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
そつちへおいて下さい	まし		広里	青楼色唐紙	1828	78	上段 14 行
入らツしやい	まし	。	女房	青楼色唐紙	1828	80	下段 7 行
二百下さり	まし		船頭	潮来婦志		130	下段 11 行
お帰りで四百下さり	まし		船頭	潮来婦志		131	上段 2 行
チドおそべりなさり	まし		船頭	潮来婦志		131	下段 2 行
そんなら行てござり	まし		船頭	潮来婦志		133	下段 7 行
サアこちらサお上りなされ	まし		中宿	潮来婦志		136	下段 17 行
チトお騒ぎなされ	まし		中宿	潮来婦志		138	上段 4 行
下へ来やしや	まし		ちよつぱり	潮来婦志		138	上段 16 行
残りのあふだりサからにおかひなされ	まし		中宿	潮来婦志		138	下段 7 行
太鼓をお始めなされ	まし		中宿	潮来婦志		139	上段 1 行
チドおやすみなされ	まし		中宿	潮来婦志		140	下段 7 行
ちよつと来やしや	まし	エトよび出す	ちよつぱり	潮来婦志		145	上段
権さまの首ツ玉サへさへつけて居やしや	まし	。	喜八	潮来婦志		147	上段 1 行
どうぞ働いでおくんなさり	まし		しら波	潮来婦志		147	上段 12 行
満汐さまでも出さつしやり	まし	。	あだ浪	潮来婦志後編		156	下段 15 行
太鼓をたたいた子になさり	まし	エ	あだ浪	潮来婦志後編		156	下段 17 行
をどりを踊らせてチトお騒なさり	まし	トひひすてて	中宿	潮来婦志後編		162	上段 10 行
おふさぎさます御一ツけんじ	まし	よと	玉の井	田舎滑稽青楼問答	1830	191	上段 9 行
おつもりにしてたんと御たのしみなさへ	まし		豊さん	田舎滑稽青楼問答	1830	191	下段 2 行
まあきいておくんなさい	まし	おまえさんがたは	ちや屋	新宿夜話		230	下段 4 行
あしたのぼんどふぞきておくんなさい	まし	よと	ちや屋	新宿夜話		230	下段 10 行
急度きておくんなさい	まし	よと	ちや屋	新宿夜話		230	下段 12 行
まアおあがりあそばし	まし	ナ	喜佐	蘭蝶此系小説妓娼●(片へんに「青」の「月」部分が「円」)子		262	下段 3 行
入ツしやり	まし	。	亭主	蘭蝶此系小説妓娼●(片へんに「青」の「月」部分が「円」)子		266	上段 17 行
お山さんたばきせてやんない	まし		あげしん	夜色のかたまり	1832	416	上段 3 行

【洒落本大成第二十九卷】

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
もん日もの日をいかにかせ	まし	。	筆者	つづれの錦	1836	100	上段 12 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
君にあひてはほたるなら	まし		筆者	つづれの錦	1836	109	下段 3 行
いらつしやい	まし	今日はまことに	茶屋娘	志家居名美	1837	155	下段 11 行
サアいらつしやい	まし	能女郎衆がござい	若者	志家居名美	1837	159	上段 7 行
ヘイいらつしやい	まし	女郎衆はお若いのが	若者	志家居名美	1837	159	上段 14 行
おらくに入つしやい	まし		歌八	志家居名美	1837	159	下段 13 行
肴挟みおあきなさい	まし		歌八	志家居名美	1837	160	上段 17 行
モンあなた御肴でもあがり	まし	と肴を取て出す	歌八	志家居名美	1837	160	下段 2 行
チト何ぞおやんなさい	まし	ト都都いつを引	歌八	志家居名美	1837	160	下段 4 行
マアひとつ召上り	まし	私が御酌をト	歌八	志家居名美	1837	160	下段 9 行
いらつしやい	まし		歌八	志家居名美	1837	161	上段 11 行
しつかりとおたのしみなさい	まし	さふならト	歌八	志家居名美	1837	161	上段 17 行
行ておやんなせ	まし		船頭	志家居名美	1837	165	上段 4 行
ヘイいらつしやい	まし	ト舟のみよしを	若者	志家居名美	1837	170	上段 15 行
うそをおつきなさい	まし	此前お出なすつた時なんざ	お梅	志家居名美	1837	171	上段 16 行
サアちとあちらへいらつしやい	まし	御紙入は御自身にと	げい者	志家居名美	1837	172	下段 9 行
ひとりで寐てお出なさい	まし	ト立てゆくそれに引かへ	おふり	志家居名美	1837	174	上段 5 行
七つ二はきつとおかへりなはい	まし	よ	女房	女郎買夢物語		252	13 行
すたれお一寸をあけなさい	まし	ここはごぼんせうだから	舟頭	女郎買夢物語		253	上段 5 行
旦那此おふきなのであがり	まし	よふ	芸者	女郎買夢物語		253	下段 2 行
おまちがよく入らしや	まし	といいながら	女中	女郎買夢物語		254	上段 1 行
おまちお鶴さんおいでなはい	まし	よ	松	女郎買夢物語		255	上段 11 行
おさかづきおをまわしなさい	まし		亀どん	女郎買夢物語		255	下段 7 行
まち旦那おでうず二入らしや	まし		松	女郎買夢物語		255	下段 10 行
亀は旦那たんとおたのしみなさい	まし	おつるさんおたのみ申辨よ	子供	女郎買夢物語		256	上段 15 行
此ゆかたおめしなはい	まし	おめしものかしはになつちやわるいよ	お鶴	女郎買夢物語		256	下段 2 行
うそおつきなはい	まし	おきやくほどうそおよくつくものはないよ	お鶴	女郎買夢物語		256	下段 9 行
定めしおさげしなはい	まし	とつめる	お鶴	女郎買夢物語		257	上段 17 行
こんどの日おきめてください	まし	ここと仲丁はおくりばせうだから	お鶴	女郎買夢物語		258	上段 4 行
おちかにきつと入らしやい	まし		松	女郎買夢物語		258	下段 9 行
まちがいなく入しや	まし		松	女郎買夢物語		259	上段 17 行

前文脈	キー	後文脈	話者	作品名	成立年	ページ数	行
おまえはんの御きにいつたらど ふかしておやりなさい	まし		女房	女郎買夢物語		260	下段 6 行
お舟へはやくおめしなはい	まし	と	女房	女郎買夢物語		260	下段 16 行
旦那おはやくおかへりなはい	まし	よおかみさんニよろしくねがい 辨よ	たけ	女郎買夢物語		261	上段 4 行
おしづかニ入らしや	まし	舟はをふいそぎニてゆく	たけ	女郎買夢物語		261	上段 6 行
おせんすおかしなはい	まし	とかりてあおぐ	まめ	女郎買夢物語		262	上段 16 行
此間の内ニおつれなさい	まし		女中	女郎買夢物語		262	下段 14 行
ちとおやすみなさい	まし		亀どん	女郎買夢物語		263	下段 14 行
おさつしておくんははい	まし	と口と口	お羆	女郎買夢物語		264	下段 11 行
かわいがつておやりなさい	まし	誠ニ女郎もおふいお客のうちニ	亀どん	女郎買夢物語		268	上段 14 行
よふすをお見せなさい	まし	みな●がきもふおつぶしなさい 辨よ	女房	女郎買夢物語		269	上段 4 行
みせておくんははい	まし	といいながらおくりてでる	おかみさん	女郎買夢物語		269	上段 13 行
またおちかニ入らしや	まし		女房	女郎買夢物語		269	上段 15 行
わたくしのところで一ばいおわ がりなさい	まし		女房	女郎買夢物語		269	下段 2 行
おちかい内ニ入らしや	まし		女房	女郎買夢物語		269	下段 3 行
一寸ごそふおなすてください	まし		女房	女郎買夢物語		269	下段 4 行
チョットかしておくんなさい	まし	トいへば	小妓	金郷春夕栄		305	上段 4 行